

2018年度 青山学院大学 ボランティアセンター活動報告書



AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

2018 年度活動ダイジェスト

2018 年 4 月 ボランティアセンターオリエンテーション



2018 年 5 月 渋谷区せせらぎまつり出展



2018 年 6 月 全国 NGO スタディツアーフェスタ 2018・海外ボランティア合同説明会



2018 年 9 月 西日本豪雨災害ボランティア派遣



2018 年 9 月 岡山県総社市英語特区ボランティア



2018 年 10 月 北海道胆振東部地震募金



2018 年 11 月 青山祭



2018 年 12 月 防災 WEEK



2019 年 2 月 秋田県仙北市冬季交流プログラム



2018 年度 青山学院大学ボランティアセンター活動報告書

目 次

巻頭ダイジェスト	1
1. 刊行に寄せて	9
2. ボランティアセンターについて	15
3. ボランティアセンター事業	
3.1 ボランティアセンター主催事業	
<ボランティア・プロジェクト・サポート制度>	17
【第 1 期】	
タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト.....	17
相馬市海浜地域学習支援プロジェクト.....	19
相模原自然教室プロジェクト.....	20
【第 2 期】	
Samaritans Place 交流プログラム	21
フィリピン食育・衛生知識プロジェクト.....	22
猪苗代魅力発信スタディーツアー.....	23
動物保護活動、啓発活動.....	24
<イベント・セミナー>	
ボランティアセンターオリエンテーション（青山）	26
ボランティア団体合同説明会（青山）	27
海外ボランティアのための危機管理セミナー（青山）	27
防災ボランティア講習前期・後期（相模原）	28
オープンキャンパス（青山）	28
ランチイベント（青山）	29
防災 WEEK（青山）	30
<災害時対応について>	31
<学生ボランティア団体メーリングリストの開設>	38
3.2 AOYAMA VISION 推進事業	
相模原キャンパスでのボランティアセンター開設および活動スタートアップ.....	39
教職員ボランティア活動補助プログラム.....	39
サービス・ラーニングパイロットプロジェクトへの協力.....	40
・サービス・ラーニング教材の制作・発行.....	41
・サービス・ラーニング学習会報告.....	41
3.3 青山学院内連携事業	
岩手県宮古市オール青山.....	42
国際協力プランナー入門.....	42
高等部グローバルウィーク.....	42
3.4 共催・協力事業	
渋谷区せせらぎまつり出展.....	43
全国 NGO スタディーツアーフェスタ 2018・海外ボランティア合同説明会	43
夏体験ボランティアキャンペーン説明会.....	44
英語 / 異文化交流キャンプボランティア.....	45
相模原市第 30 回大野北銀河まつり	45

警視庁防災ボランティア	46
総社市英語特区ボランティア	46
外国にルーツを持つ子どもの学習支援について	47
東北学院大学シンポジウム	47
仙北市冬季交流プログラム	48
渋谷区こどもテーブル	49
4. 学生ボランティアプログラム	
Roote について	51
活動プログラム	51
・ 陸前高田	52
・ 塩竈	56
・ 熊本	63
・ 防災	66
・ 福祉	68
・ 食品ロス	70
・ ネパール	73
・ インドネシア	75
・ フィリピン	76
5. 資料	
5.1 ボランティアセンター利用状況	79
5.2 ボランティアセンター規定	85
5.3 ボランティアセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ	90
5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆さま	
提携・協力団体	92
寄付・助成をいただいた皆様	93
そのほかお世話になった皆さま	93

1. 刊行に寄せて

センター長挨拶

ボランティアセンターの1年

鈴木 眞理

青山学院大学ボランティアセンターも、徐々に、形が整ってきている。多くの方々に支えられてのことであり、関係の方々に感謝申しあげる次第である。

形が整ってくることは、一般の組織では重要なことである。判断の基準や手順が明確になり、物事が効率的に進み、「形」・見た目も美しくなる。上部の組織や外部の組織などとの関係も安定し、位置づけも明らかになる。そこでの活動が「評価」され、「勲章」(?) 授与の対象にもなる。しかし、ボランティア活動の関連領域では、「形が整う」ということをどのように考えればいいのか。一般の組織と同じように考えるのか、NPO の活動領域ではどうなのか。

ボランティアセンターなのだから、ボランティア活動そのものではない、一般の組織と同じだと考えれば、「形が整ってきている」ことは、結構なことなのだろう。ただし、形式が内容を規定するようなことになってしまうと、本末転倒なのだろう。決まった、美しい形にはなりにくい、エネルギーがほとばしるような状況が重要なのではないか。

「見返り」を考えるような「ボランティア活動」、個人個人が責任を持って現実と向き合うのではない「ボランティア活動」、庇護された「ボランティア活動」、手が汚れない「ボランティア活動」、後悔のない「ボランティア活動」などというものは、あり得ないのだろう。類似の活動とは本質的にどこが違うのか。そのようなことを考えながら、ボランティアセンターの運営が行われる必要があるのだろう。自発的な活動は、しんどい。続けるために本質から離れるか、本質を重視して「形」や世俗的利害に背を向けるか、なかなか難しい判断が必要になるのだろう。

青山キャンパス

ボランティアコーディネーター 佐藤 亜希

青山学院大学にボランティアセンターが開設から2年半、年度としては3年度目を迎えることができ、ようやく学生のボランティア活動を支援する基盤が整ってきた、と実感する1年でした。

一方で広く日本社会に目を向けると、夏以降大規模な自然災害が国内各地で発生し、12月には東京2020オリンピック・パラリンピックの大会ボランティアに多くの方が志願するなど全国的にボランティア機運が高まる年でもありました。

ボランティア活動を始めのきっかけは十人十色、ボランティアセンターに足を運ぶ学生が求めていることもそれぞれです。学生たちの思いの多様性の一部を垣間見ることのできた1年でもありました。

この報告書を手に取り、お読みいただいた皆様に、ボランティア活動を通じた学生たちの成長を感じていただければ幸いです。そして、今後のセンターの発展のために引き続きご支援・ご協力賜りたくお願い申し上げます。

ボランティアコーディネーター 秋元 みどり

本年度より、青山学院大学ボランティアセンターでの事業に関わり、このように活動の報告をさせていただけることに感謝します。昨年から取り組まれている、サービス・ラーニングへの接続を見据えたパイロットプロジェクトでは、国内外の大学で先行する実践から知見を深めると同時に、青山学院大学におけるサービス・ラーニングをどのように構築していくかについて多角的に検討してまいりました。関係する教職員をはじめ、他大学・学校の方々、また地域や市民活動に関わるみなさまからの真摯な協力を賜りながら前進しつつあります。これまでの学生支援における歩みを受けつつ、より多様な協働を生み出し、していくことができますよう、今後ともご支援お願い申し上げます。

ボランティアコーディネーター 島崎 由宇

本年度より青山学院大学ボランティアセンターに着任し、こうして活動報告の場をいただけることに感謝いたします。

思えば学生時代の私にとって大学ボランティアセンターという場は、新たな活動と出会いを生み出す拠点のような存在でした。何気なくフラッと立ち寄り、コーディネーターの方と話していると、その場で新たな活動に繋がり、出会いと経験が広がっていきました。そうした出会いや経験が巡り巡った先に今、私自身がボランティアセンターに席を置いていることに不思議な感覚を覚えつつも、今度はコーディネーターという立場でこれまでの経験を活かし学生へ還元していきたいと考えています。

本学ボランティアセンターが、学生や地域の皆様方と共に市民社会を創っていく一つの歯車となれるよう尽力して参りますので、今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

学生生活部学生生活課 ボランティアコーディネーター（2018 年度より委嘱） 中尾 匠吾

ボランティアセンターが開設して 2019 年 4 月 1 日で 2 年半が経過しました。前身のボランティア・ステーション時代から見守り続けボランティアセンター開設～今日に至るまでであったという間に時間が経過したような気がします。2017 年度にはサービス・ラーニングへの接続を見据えたプロジェクトの始動、2018 年 4 月には相模原キャンパスでも分室を開設するなど、(本学にしては) かなりのスピード感を持った展開です。2019 年度もサービス・ラーニング関連でより大きな動きを予定しています。

青山学院の事業計画の一端を担っているという使命感を持ちつつも、皆様に必要とされるボランティアセンターづくりをすべく、学生・地域社会の目線を大切に、一職員として微力ながら貢献していければと考えております。皆様方におかれましては、今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学生生活部学生生活課 斉藤 恭子

ボランティアセンターが設立されて、早くも 2 年半が経ちました。設立時の慌ただしさを思い出すと、ついこの間のことのような、ずいぶん前のような、不思議な感覚に包まれますが、今はセンターの業務も安定し、軌道に乗ってきたように思います。

学生生活課では、課外活動に励む学生の支援から事件事故対応まで行うため、多様な学生と関わる機会に恵まれています。ボランティア活動に勤しむ学生は、他者との関わりに積極的で、熱意を持って地道に行動する人が多いです。また、奉仕活動という意識ではなく、自身が楽しんで活動している学生が多いと感じます。こういったボランティア学生の特質をみると、ボランティアセンターは本学のビジョンである「サーバント・リーダーの育成」のために最適の場所であると実感すると同時に、センターが教育的側面を支える組織になるよう、ますます尽力しなくてはならないと身が引き締まる思いです。

設立時の 1 年生は 3 年生になり、少しずつ就職活動を始める年です。本学の学生が「地の塩、世の光」となり社会で活躍できるよう、関係者の皆さまにはご支援いただければ幸いです。

学生生活部学生生活課 藤枝 彩香

2018 年 4 月からボランティアセンターに職員として関わらせて頂いております。職員として何ができるかを模索しながら、また学生の活動に触れながらサポートをすることで、私自身にとっても学びの多い 1 年となりました。

関わり始めた頃はボランティアをしたことがないなと思っておりましたが、日常でのちょっとした手助けや地域活動への協力などがボランティアであることに気づかされ、それにより身近なものと捉えることができました。また、様々なボランティア活動を知ったことにより、参加するきっかけとなり、個人としてもボランティアセンターに関われたことを嬉しく思います。

この報告書はボランティアセンターの 1 年間の記録となっています。今後も多くの活動報告をできるようサポートしていきたいと思っております。最後になりましたが、青山学院大学ボランティアセンターに関わる全ての方に感謝申し上げます。

相模原キャンパス

ボランティアコーディネーター 三神 憲一

本学にボランティアセンターが開設して2回目の刊行となります。相模原キャンパスのボランティアセンターは2018年4月に開設されましたので、今回が初めての報告となります。皆様のお力添えあって、無事にスタートアップが完了いたしました。感謝、御礼申し上げます。

ところで、そもそも、大学がボランティアを組織的に展開するようになったのは何故でしょうか。その経緯を知る手がかりとして、2005年の文部科学省中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」を参考にすることができそうです。この答申の中で「大学は教育と研究を本来的な使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献（地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与）の重要性が強調されるようになってきている。」と述べられている箇所があります。この「大学の社会貢献」という文脈から、その役割の一部を担うことが期待できるボランティアを推進する流れが、大学全体に広まってきているように感じます。

ボランティア活動を推し進めるボランティアセンターが、どこまで大学の社会貢献に寄与することが出来るのか。その一端を担っている重みを感じつつ、未熟者ですが、日々頑張っておりたいと思います。引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

相模原事務部学生生活課 阿部 竜也

2018年度、相模原キャンパスにボランティアセンター分室が開設いたしました。

地域共生型キャンパスを一つのコンセプトに2003年に開学した相模原キャンパスでは、学生の地域交流活動やボランティア活動支援を積極的に行ってまいりました。しかしながら、2013年の就学キャンパス移行に伴う学内の組織改編以後、組織的支援が行き届かない部分がありました。そういった流れの中での相模原キャンパスのボランティアセンター開設は、組織的なボランティア活動支援体制を再構築するだけでなく、地域との繋がりやキャンパスの開学コンセプトに立ち返る意味でも意義あるものであったと感じております。

分室の開設初年度は全てが試行錯誤の一年間でしたが、学内外関係者の皆様のご協力により、無事走り始めることが出来ました。今後もボランティア活動を通して、学生に気づきを与えられる、地域・社会の皆様に貢献できるボランティアセンターであるべく尽力してまいります。関係者の皆様におかれましては、今後とも温かいご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

相模原事務部学生生活課 松本 宏美

ボランティアセンターの業務に関わらせていただいてから約1年が経ちました。私自身も学生時代ボランティア活動に参加した経験がありますが、ボランティアを通して本当に多くのことを学び、成長できたと考えています。職員となっても、一人でも多くの学生に限られた大学生活の中でボランティア活動によって授業では得られない経験をし、新しい発見を得てほしいという思いをもって関わってきました。

今後も更に充実した活動ができるよう、尽力してまいりたいと思います。引き続きご支援、ご協力を賜りますよう、お願いいたします。

2018 年度学生代表 青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科 鏡 詩織

大学生活を決める一大イベントサークル選び。2016 年春、私は大量のビラを目の前にどのサークルに入ろうか悩みに悩んでいました。「あれでもない、これでもない」と決めきれずにいたのですが、説明会で出会った先輩方の熱意や人柄にピンときて「ここなら充実した大学生活を送れそう！挑戦してみたい！」と入会を決意したのが Roote の前身、ボランティア・ステーションでした。あの時の直感は正しかったです。光陰矢の如く、あっという間の3年間でした。

3 年間の Roote まみれの生活を一言で言うなら「楽しかった！」これに尽きます。とにかく楽しかったですね。とことん楽しみ尽くしました。とは言っていますが、最初から100%楽しめたわけではありません。震災による苦しい思いはせず、復興に向かう前向きで美しい部分にだけ関わることに罪悪感を覚えたり、年齢も生活している環境も異なる方とどう接していいのかわからず悩んだりしたこともありました。そんな様子が伝わったのでしょうか。活動中に出会った方に「現地で活動することを楽しんでほしい。そのほうがここにいる人たちの活力になるし、あなたのためになる」と声をかけていただきました。この言葉がそれまでの私のもやもやした気持ちを晴らしてくれました。私が楽しむことで、だれかの役に立てると気づけたことは何よりの収穫で、それ以来どんなボランティア活動をする時も楽しむことを心がけていました。この「何事も楽しむこと」はボランティア活動だけでなく、日々の生活でも意識していて、私の人生の軸となる大事な価値観です。こうした自分を支える考え方に出会えたことは私の財産です。

こうして充実した活動ができたのも、ボランティアセンターのコーディネーターの方々、大学職員の方々、現地でサポートをしてくださる方々のお力があったからに他なりません。この場をお借りして感謝申し上げます。

Roote は来年度から新体制となります。後輩たちは今までとは違う悩みを抱えたり、壁にぶつかったりすることもあるかと思います。私たちも全力でバックアップすると共に、みなさまの変わらぬ厳しくも温かいご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

2. ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターは青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向けて、実践するボランティア活動を促進させる目的で設立しました。また、2018年4月には相模原キャンパスにもセンターを開設し、両キャンパスでのボランティア活動支援の基盤が整いました。

2011年3月の東日本大震災以降、青学生が主体的に活動展開してきたボランティア・ステーションを改組する形で学生へのボランティア活動情報・機会の提供や大学としての社会貢献活動の一端を担います。

■設 立 2016年10月1日設立

■所在地 青山学院大学青山キャンパス1号館1階
青山学院大学相模原キャンパスB棟1階

■センターミッション

- ①学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
- ②大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動の社会的効果を向上すること
- ③社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること

■事業内容

A. 活動支援分野（直接的支援）

- （1）ボランティアへの参画機会の提供
- （2）ボランティア活動の実施促進
- （3）ボランティア活動に参加する学生・団体の能力強化

B. 環境整備分野（間接的支援）

- （1）ボランティア活動に関する学内外の専門家・関連団体との連携の促進
- （2）ボランティア活動の社会的・教育的効果の評価と勧告
- （3）ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信

3. ボランティアセンター事業

3.1 ボランティアセンター主催事業

＜ボランティア・プロジェクト・サポート制度＞

青山学院大学ボランティアセンターでは、2017 年度から、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動の促進と可視化を目的として、ボランティア・プロジェクト・サポート制度を開設した。前期・後期の年間 2 回の公募期間を設け、2018 年度は計 7 件プロジェクトが採択された。

【第 1 期】

募集期間：2018 年 5 月 16 日（水）～ 6 月 8 日（金）

応募件数：4 件（採択件数 3 件）

タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト	
実施期間	2018 年 7 月～ 10 月
実施場所	タイ北部チェンラーイ県、青山学院大学相模原キャンパス
活動概要	タイ北部チェンラーイ県でオーガニック・コーヒーを栽培することで生計を立てている山地民が居住する地域で活動する NGO「ルンアルン・プロジェクト」代表の中野穂積氏の下で、青学生として彼女から学べることは何か、学生が途上国の課題に向き合う重要性について学び、日本の若い世代に彼らが栽培するコーヒーと、そのコーヒーが作られる背景にある現状、そして生産者の文化について伝えるプロジェクトを実施した。
社会的効果	本プロジェクトを通して一定の人々にタイ北部産のオーガニック・コーヒーのおいしさと、その背景にあるものについて知ってもらうことができた。10 月上旬に開催された相模原祭において、来場された幅広い年齢層の方々に、タイ北部産のコーヒーとその背景にあるものに対して関心を深めてもらうことができた。また、青山学院高等部の自学自習団体「BLUEPECO」との「途上国における地域創生」に関するプレゼンテーションおよびパネルディスカッション企画では、高校生に対して学生が途上国に内在する課題に向き合う重要性と直接現地に足を運び、学びを深める体験型学習の魅力、そして学生として現地とどう関わっていくのかについて高校生・大学生の双方で学びを深めることができた。

今後の展望	本プロジェクトの年内スケジュールでは、現地調査に赴き、調査でインプットした内容を相模原祭などの場でアウトプットすることに留まるスケジュールであったが、現地のことをまだ知らない人々に現地のことを伝えることができたことは、間接的にはあるが、現地に対する理解を深める確かな一歩となったことは間違いないだろう。そして、そういった間接的な活動は、長期的に見れば現地に直接的な貢献ができるきっかけとなる可能性は否定できない。今後の展望としては、今回実施したような現地のことを伝え広めていく活動を継続して行っていきたいと思う。また、現地に関して勉強不足な部分があるので、今後も現地と関わっていき、現地に内在する課題やニーズを模索していきたい。
実施者の感想	タイ北部チェンライ県には 2017 年の 11 月にフィールド・スタディーとして訪れていたため、今回の現地調査で 2 回目の現地訪問となった。プロジェクトとして明確な目標を持って挑んだ今回の現地調査では、前回フィールド・スタディーとして訪れた時の現地をみる視点とは異なった視点で、現地を俯瞰することができ、非常に多くの有益な情報を収集することができた。しかし、しっかりとしたプロジェクトにしようと高いモチベーションで挑んだがために、時にメンバーとのモチベーションの差にもどかしさを感じるがあった。私は、この経験のおかげでチームワークとリーダーシップの重要性とその難しさを強く実感し、その反省から学ぶことは多々あった。



相馬市海浜地域学習支援プロジェクト	
実施期間	2018 年 8 月 6 日（月）～ 8 月 8 日（水）
実施場所	福島県相馬市内
活動概要	福島県相馬市教育委員会からの依頼を受け、東日本大震災で被災した海浜地域の児童生徒を対象としたサマースクールを実施した。 相馬市立中村第二小学校を会場として、学習支援に加えて、進学相談、夏休みの自由研究を視野に入れた制作活動等を行った。相馬市立中村第二小学校 6 年生ならびに、相馬市立中村第二中学校の全学年の希望者が参加した。
社会的効果	海浜地域で学習意欲や学力が高くない児童生徒と聞いていたが、上述したように参加状況・満足度共に高い結果となった。3 日目には大学生による進路相談の一環として、学習や進学についての大学生のスピーチならびに質疑応答の時間も設け、活発な質疑応答がなされた。こうした活動を通して、学習意欲や学力が高くない児童生徒への学習支援のみならず、進学支援にも寄与することができた。
今後の展望	交通の便の悪い地域であり、学生が利用できるような社会施設もないため、交通費と宿泊費の負担が大きいこと、ならびに、サマースクールにおける制作活動等の材料費もすべて大学側で負担しているため、経済的な負担がかなり大きなものとなった。しかし、教育委員会側から次年度以降の活動を依頼されていることもあり、今後は、市の予算による補てんの可能性など、学生の経済的負担の軽減を相談できる環境が整いつつある。
実施者の感想	教育委員会主導での実施ということもあり、児童生徒が十分な人数集まるのにかきを揉んだが、実際には、毎日 50 名近く、延べ人数にして 242 名の児童生徒が参加してくれた。教育委員会が実施したアンケート結果等からも、児童生徒の満足度や、次年度以降への期待の高さをうかがうことができ、学生たちが経済的にも時間的にも大きな負担をして実施した活動が実を結んだことをとても嬉しく思う。 教育学科で教員志望の参加学生が多かったため、遠隔地域の学校や学習活動を体験することができたことや、教育委員会の方々のお仕事に触れる機会が得られたことなど、多くの学びがあった。



相模原自然教室プロジェクト	
実施期間	2018 年 10 月～ 11 月
実施場所	JA 相模原営農センター、相模原中央緑地（こもれびの森）
活動概要	泥んこになるまで遊んで、たくさん食べよう♪秋の収穫祭り 〈日時〉10月27日（土）10：00～13：30 頃迄 〈場所〉JA 相模原市 営農センター 〈内容〉さつまいも掘りをした後、さつまいもを使った料理をみんなで食べたり、芋や芋づるを使ったあそび みんなで作って遊ぼう♪秋の落しもので製作会 〈日時〉11月11日（日）9：00～13：00 頃迄 〈場所〉相模原中央緑地の芝生広場（こもれびの森） 〈内容〉かながわの美林 50 選の緑地を散策後、ドングリや松ぼっくりを使ってリースやおもちゃを作ったあそび
社会的効果	本プロジェクトが行った自然体験活動を通じて自然環境に対する豊かな感受性、自然環境に関する見方や考え方、自然の中で活動する実践力を育成できたと感じる。また、活動を通じて親が子どもの性格、好きなことについて新たな発見をしていた場面が多くあり、改めて自然遊びの重要性、楽しさを発見する親御さんも多くいた。
今後の展望	活動の中でいただいた意見として、このような単発のイベントも良いが農作物の収穫までのサイクルを一貫して体験できるようなイベントがあればもっと子どもは食べ物のありがたみを感じられるのではないかといいものがあつた。それはまさしく自分たちが来年度以降やりたいと思っていたことであり、現在計画書を作成中である。また、単発だと参加者と深く関わることは難しいと今回のプロジェクトを通じて分かった今後の課題として、次回は中長期の一定期間関わり続けるようなプロジェクトを作成し、子どもの成長をメンバーも感じられるようにしたいと思った。現在、来年度事業として相模原市内の農家さんと協力して、1年間の米作り体験プログラムを企画し検討を重ねている。
実施者の感想	子どもたちと一緒に「楽しむ」ことを通じ、自然環境に対する豊かな感受性、自然環境に関する見方や考え方、自然の中で遊ぶことの大切さを学ぶことができた。本企画は子ども達に自然を体感してもらうことを通じ、自然の中で活動する実践力を身につけてもらうこと主な目的としていたが、大学生のほうが子ども達から学ぶことが多かった。子ども達がどのようなものに興味を示すのか、どのようなときに楽しそうな表情をするのか、その生き生きとした姿から、この相模原市の自然を守っていききたいと強く感じた。



【第 2 期】

募集期間：2018 年 10 月 1 日（月）～ 10 月 31 日（水）

応募件数：4 件（採択件数 4 件うち 1 件は実施サポート）

Samaritans Place 交流プログラム	
実施期間	2019 年 2 月 12 日（火）～ 15 日（金）
実施場所	Samaritans Place（フィリピン）
活動概要	◇ Samaritans Place に滞在をし、以下の活動を実施した。 ・孤児院での家事、育児の手伝い ・施設補修の手伝い ・畑での作業 ・孤児たちとの交流（英語教育、音楽教育、遊ぶ、散歩） ・日本文化の披露（折り紙や凧等の遊び） ・スタッフとの交流、ミーティング（文化交流、仕事の手伝い） ・キリスト教礼拝での奉仕、奨励
社会的効果	スタッフによると、フィリピンの公立学校では音楽の授業があるものの十分ではなく、ましてや楽器に触れる機会などないという。そのような中で、子どもたちが本物の楽器に触れて音を奏でる機会を設け、子どもたちの人生に音楽のきっかけを与えることができたのは、我々としては大きな成果であるとする。最終的には SP の子どもたちだけでなく、近隣の貧困村に住む人々への音楽教室を開けるよう考えている。また、我々の活動によってスタッフの負担軽減にも貢献できた。
今後の展望	我々は現地との繋がりを続けていきたいとの思いでは一致しているが、社会人となった後にどのように活動していけるかはあまり見えていない。現地活動こそが醍醐味でもあるので、次回の訪問を視野に検討していきたい。また、青山学院大学と現地との繋がりをどうするかも課題である。
実施者の感想	これまでの経験があるからこそ、事前準備も円滑に進み、現地でも即座に活動を始められ、帰国した直後から今後の活動を見据えています。また、「継続」が「信頼」を生むことも感じました。継続してきたからこそ、現地スタッフからの信頼も厚くなり、重要な仕事も任されるようになりました。また、日本からのボランティアと SP の子どもたち・スタッフという関係ではなく、一人の人と人とのより深い関係へと変わっていきました。今回は、AIMEC との提携が特徴でもありました。社会人を中心として活動している NPO 団体と大学生が提携して企画を実現させられたことが良い前例となればと思います。

フィリピン食育&衛生知識プロジェクト	
実施期間	2018 年 11 月～2019 年 2 月 フィリピン渡航期間 2019 年 2 月 7 日（木）～2 月 14 日（木）
実施場所	フィリピン セブ市内
活動概要	子どもたちとカレーと一緒に作ることによってバランスの良い食事をとることの大切さを伝える。今は実践することが難しいとしても、将来十分なお金を稼ぐことができるようになったらバランスの良い食事をとることの大切さを思い出してもらえようにする。使用した調理器具等は実施場所に寄付することによって、私たちの帰国後も継続してもらおう。また、健康な歯を保つために歌を通して歯磨きの習慣をつけてもらい、日常生活の中で持続的に行ってもらう。
社会的効果	【カレー作り&歯磨き】 当日はロレガの子ども達 90 人～100 人程度が集まり、大人数の子ども達を扱うことに苦戦したが、全員が食事をし、怪我なく調理を終えることができた。また、食育の紙芝居のテーマ「野菜パワーで元気になろう！」というメッセージを歌なども入れてわかりやすく伝えることができた。「今日は野菜食べれた！」という声や、「兄弟にも歯磨き教えるよ！」という声を子ども達から聞いたことは成果と言えるだろう。「日常にない経験と楽しさを提供する」という根本的な目標は達成できたと感じている。 【藍染め】 当日は 20 人の幼稚園児が対象だった。藍染体験は子どもたちにとって貴重な体験であり、日本の文化を知ることや協調性を養う良い機会となっただろう。また、私たちメンバーと子どもたちが遊んだり、会話したりして深く交流できた。
今後の展望	より工夫を加えることによって子ども達のこれからの生活における歯磨きの持続性に配慮したり、栄養バランスの大切さをよりわかりやすく伝えるべきだった。今後は、活動後のモニタリングとして連絡を取り持続性に配慮していきたい。また、使用する材料をスーパーマーケットで購入したため少し高くなってしまったため、地域の方々でも買うことができるような安価な食材を使用するべきだった。 藍染する工程に、小さい子どもたちが関われない工程が多くあった点においては、年齢層に合わせたものを準備するなどの改善が必要である。さらに、最後の締めくくりがなくプロジェクトが終わってしまい、子どもたちへのフィードバックが十分ではなかった。また、Tシャツの回収時期がテスト期間にかかってしまうなど、配慮の至らない点があったため、計画性をもって改善するべきである。
実施者の感想	今回、これらのプロジェクトを通し、私たちの理念である楽しさというものフィリピンの現地の人々と共有することができたことは大きく感じることができた。また、歯磨きのプロジェクトでは子供たちが習慣を身につける第一歩になったのではないかと強くおもうことができた。初めての経験ながら、無事 2 つのプロジェクトを安全に運営することができたのは、準備段階での試行錯誤が入念にされていたためであると思う

反面、現地に行かなければわからなかったこと、現地の状況のイメージ不足があったこともあり言語の壁や、配慮の至らない点が出てきてしまったところもあった。子供を対象にするという点で、何を一番伝えたいのかという軸を大切にすべきであるということが今回のプロジェクトを通し、大事であると思う。



猪苗代魅力発信スタディーツアー

実施期間	2019 年 2 月 4 日（月）～ 2 月 5 日（火）
実施場所	福島県猪苗代町内
活動概要	①猪苗代町立吾妻中学校との交流会 各学年において英語の授業に参加し、生徒と英語でコミュニケーションを図った。その後 1 年生のクラスにおいて交流会を実施した。主に大学生活や勉強に関する質問を受け、大学生が応答する形式を採った。現地の先生方や関係者からは「大学に関心が薄いと思っていた生徒が目の色を変えて聞いていた。」「こんなに生き活きた生徒の姿を久しぶりに見た。」などの声を頂いた。 ②風評被害に関する講演会 JA 会津よつば会津東部営農経済センターにおいて、農作物の風評被害に関わる勉強会を実施した。福島第一原発事故による風評被害の状況や、改善のための努力、今後の展望などについてお話を頂いた。
社会的効果	・吾妻中学校の生徒に対し、学習意欲や進路選択への意識を向上させた。 ・学生に対し、福島の農業が抱える風評被害問題への意識を高めた。 ・震災以前、学校教育旅行の行先として人気だった猪苗代町が、再び行先として選ばれる可能性が高まった。（参加学生 9 名中 5 名が 4 月から教員、もしくは将来教員志望である。）
今後の展望	学生にとっての学びが中心であり、猪苗代町や町民の方にどれほど貢献できたかどうかは未知数である。来年度実施できる場合はアドバイザーの方と相談し、学生の力を活かせる活動としたい。
実施者の感想	今回の訪問を通じて、「風評被害」というものがどのように広がり、払拭のためにどれほどの努力が続けられているか具体的に知ることができた。参加した学生の多くは「震災」＝「津波による被害」と考えていたが、それぞれの地域が多様な問題を抱えていることを理解できたプロジェク

トであった。残された課題でも述べた通り猪苗代町や町民の方にどれほど貢献できたかどうかは未知数であり、学生が勉強させていただく機会がほとんどであった。しかし学生の間では「福島産の食材を探して買おうと思う」などの声も上がっており、風評被害への理解・関心は活動前と比べて数段高まっている。今後も続けて猪苗代・福島産の食材などを買い、その良さや安全性を少しずつ広めることが私たちにできる社会貢献であると感じている。



動物保護活動、啓発活動	
実施期間	2018 年 10 月 31 日（水）～ 12 月 14 日（金）
実施場所	青山学院大学青山キャンパス
活動概要	・ PANEL FOR LIFE 実際に保護された犬、猫の等身大パネルを設置し、保護犬・保護猫の存在を知ってもらう。また、パネルの QR コードを読み込むと、保護犬・保護猫の情報にアクセスすることができるという仕組みを学内で実施した。
社会的効果	青山学院大学の学生の皆さんに動物保護活動や犬猫の殺処分数について知ってもらうきっかけになった。実際に動物保護ボランティアを始めようと加入してくれたメンバーが 11 人もいて、これからもその数を増やしていきたい。
今後の展望	動物保護活動に興味のある学生はたくさんいるが、実際にボランティアに参加するには方法が分からない学生が多いことが分かった。また、私たちが知らない知識を持った学生もいて、これから活動するにあたって知識を身につけることが最も必要だと感じた。これからの活動で、より多くの学生が動物保護活動を身近に感じ、ボランティアに参加する学生が増えるように SNS などでの広報を増やしていこうと思う。これからも活動を終える毎にアンケートを行い、動物保護活動に興味のある学生の数の推移を観察する。
実施者の感想	・ (財) クリステル・ヴィ・アンサンブルの企画である PANEL FOR LIFE のパネルを食堂に設置し、青山学院大学の学生・職員に保護犬・保護猫の現状を啓発した。これにより、私たちの具体的な動物保護活動を知ることができ、団体の活動に参加したい学生が増えた。

- ・三角ポップに青山学院大学動物保護学生団体きすあにのメンバー募集・犬猫殺処分数の現状・PANEL FOR LIFE の宣伝を掲載して、食堂に設置した。メンバー募集のため LINE の QR コードを載せ、動物保護活動に興味のある生徒の質問や加入を受け付けた。LINE の登録者は 55 人になり、実際に加入した学生は 7 人だった。反省点は、情報量が多すぎたため目に入らない学生もいたこと、三角形では作成に手間がかかることがあげられる。次回、設置する際は円柱を設置することを考えている。また、LINE の登録は拒む学生もいるため、次回からはInstagramの QR コードと活動写真、動物の写真やイラストを掲載する。
- ・学生ポータルに、パネル・三角ポップを設置したこと・きすあにのメンバー募集の内容・LINE の ID を広報した。反省点は、SNS の作成を早く行い、掲載すべきだったことである。



＜イベント・セミナー＞

事業名	ボランティアセンターオリエンテーション																																						
日時	2018年4月4日（水） 12:40～13:10 / 17:00-17:30 2018年4月5日（木） 12:40～13:10 / 17:00-17:30 2018年4月6日（金） 12:40～13:10																																						
会場	ボランティアセンター（青山キャンパス）																																						
参加者数	167名																																						
内容	新入生を対象にボランティアセンターの利用方法や2018年度実施予定のボランティアプログラムについて説明。																																						
成果	大学からの郵送物にチラシを封入したことが功を奏したと思われる。内10名は留学生もしくは外国籍の学生であり、女子短大からの編入生や内部進学者も見受けられた。参加者層は女:男が8:2程度。学部学科は以下のグラフの通り。 学部・学科 <table border="1"> <caption>参加者層の学部・学科別集計</caption> <thead> <tr> <th>学部・学科</th> <th>人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>法学部法学科</td><td>35</td></tr> <tr><td>文学部英米文学科</td><td>28</td></tr> <tr><td>国際政治経済学部国際政治学科</td><td>22</td></tr> <tr><td>文学部日本文学科</td><td>18</td></tr> <tr><td>文学部フランス文学科</td><td>10</td></tr> <tr><td>経営学部経営学科</td><td>8</td></tr> <tr><td>国際政治経済学部国際経済学科</td><td>8</td></tr> <tr><td>経営学部マーケティング学科</td><td>7</td></tr> <tr><td>総合文化政策学部総合文化政策学科</td><td>6</td></tr> <tr><td>経済学部経済学科</td><td>6</td></tr> <tr><td>教育人間科学部教育学科</td><td>6</td></tr> <tr><td>文学部比較芸術学科</td><td>4</td></tr> <tr><td>国際政治経済学部国際コミュニケーション学科</td><td>4</td></tr> <tr><td>文学部史学科</td><td>3</td></tr> <tr><td>経済学部現代経済デザイン学科</td><td>3</td></tr> <tr><td>文学部比較芸術学科</td><td>2</td></tr> <tr><td>女子短期大学 現代教養学科人間社会専攻</td><td>2</td></tr> <tr><td>教育人間科学部心理学科</td><td>2</td></tr> </tbody> </table> また、障がい学生支援センターで募集しているノートテイク希望者を同時に募ったところ10名が関心を示した。	学部・学科	人数	法学部法学科	35	文学部英米文学科	28	国際政治経済学部国際政治学科	22	文学部日本文学科	18	文学部フランス文学科	10	経営学部経営学科	8	国際政治経済学部国際経済学科	8	経営学部マーケティング学科	7	総合文化政策学部総合文化政策学科	6	経済学部経済学科	6	教育人間科学部教育学科	6	文学部比較芸術学科	4	国際政治経済学部国際コミュニケーション学科	4	文学部史学科	3	経済学部現代経済デザイン学科	3	文学部比較芸術学科	2	女子短期大学 現代教養学科人間社会専攻	2	教育人間科学部心理学科	2
学部・学科	人数																																						
法学部法学科	35																																						
文学部英米文学科	28																																						
国際政治経済学部国際政治学科	22																																						
文学部日本文学科	18																																						
文学部フランス文学科	10																																						
経営学部経営学科	8																																						
国際政治経済学部国際経済学科	8																																						
経営学部マーケティング学科	7																																						
総合文化政策学部総合文化政策学科	6																																						
経済学部経済学科	6																																						
教育人間科学部教育学科	6																																						
文学部比較芸術学科	4																																						
国際政治経済学部国際コミュニケーション学科	4																																						
文学部史学科	3																																						
経済学部現代経済デザイン学科	3																																						
文学部比較芸術学科	2																																						
女子短期大学 現代教養学科人間社会専攻	2																																						
教育人間科学部心理学科	2																																						



事業名	学生ボランティア団体合同説明会
日時	2018 年 4 月 13 日（金） 17 : 00 ～ 20 : 00
会場	17409 教室（青山キャンパス）
参加者数	60 名程度（推定）
内 容	新歓イベントの一環として学内の学生ボランティア団体 7 団体の活動紹介を合同で実施した。プレゼン後は各団体の個別ブースで気軽に相談できるような会場レイアウトとしたことで、参加者のニーズに合った説明会となった。
成 果	5、6 限合わせて 150 名程度の参加者を想定していたが実際の参加者はそれを下回った。しかしながら、ボランティアセンターとして普段接する機会が少ない学生団体と交流する機会が持て、メーリングリストへの登録の呼びかけやサークルの現状課題などを直接把握することが出来た。



事業名	海外ボランティアのための危機管理セミナー
日時	2018 年 6 月 12 日（火） 19 : 00 ～ 20 : 00
会場	17403 教室（青山キャンパス）
参加者数	11 名（内職員 2 名）
内 容	国際ボランティアや海外インターンシップ、留学に関心のある青学生向けに実施。今年度は渡航する学生の身の安全を確保するために、出発前・活動先での急な体調不調の対処方法について、ネパールで入院した学生の体験談から学ぶ。ゲスト講師として AIG 損害保険株式会社の営業担当を招き渡航先でトラブルを回避するためのコツを説明してもらった。
成 果	小人数ではあったが Roote 国際協力部のメンバーを中心に夏のインドネシアプログラム参加者を交えての内部研修的なセミナーとなった。海外ボランティア先での急な体調の変化と対処方法について実際の渡航学生の体験から語ってもらった。その後 AIG 損保の営業担当者から渡航先での学生の事故例を紹介してもらい、保険適用となる各種サービスについて詳しく説明してもらった。具体的に海外ボランティア先が決まっている参加者ばかりだったため、国や地域に特定した感染症のリスクや対応策について伝えることが出来た。
協 力	AIG 損害保険株式会社

事業名	防災ボランティア講習（前期・後期）
日時	（前期）2018年7月12日（木）、13日（金）16：50～18：20 （後期）2018年12月7日（金）18：30～20：00
場所	（前期）相模原キャンパス D211・D211 教室 （後期）相模原キャンパス F棟2階グローバル・ラーニング・コモンズ
参加者数	（前期）8名 （後期）8名
内容	（前期）地震発生後を想定した教室を用意し、発災直後の避難体験と、防災トランプを用いたワークショップを行い、地域防災理解についての導入を行った。 （後期）防災教材 HUG を用いたワークショップを行い、災害時における避難所の運営についての理解を深めた。
参加者のコメント	・小規模ながら大変楽しく学べました。（前期） ・その時々への対応がいかに難しいか実感した。（後期） ・次々来る避難民への対応に苦戦しました。実際にこのようなシチュエーションになった時は、（避難所）運営に参加しようと思った。（後期） ・実際に自分で体験してみることで、より深く学ぶことが出来ると感じました。（前期）
その他	前期・後期ともに講習の中心は主体性・協調性が求められるワークだったので、進行について多少の心配があったが、始まると個人、グループともに真剣に取り組んでいる様子がうかがえ、参加者にとって有意義な時間であったと感じた。このような企画を継続的に実施することで、災害時に活躍できる人材の発掘・育成をはかり、相模原キャンパスにおける災害時対応について、ボランティアセンターとして何かしらの協力ができる体制を築いていければと思う。
主催	ボランティアセンター（相模原キャンパス）

事業名	オープンキャンパス（青山）
日時	2018年8月3日（金）～5日（日）
会場	ボランティアセンター（青山キャンパス）
参加者数	8月3日（金）22名 8月4日（土）30名 8月5日（日）35名 合計 87名
内容	オープンキャンパス大学共通企画として「聞いて、見て、ちょっと体験ボランティア」を実施した。Roote の活動展示・対話やVR体験の他、折り紙づくりの簡単なボランティア作業を行った。ボランティアに力を入れている大学を志望している高校生が来室したり、中学時代に陸前高田を訪れた高校生がVR越しの現地を懐かしんだりする姿が印象的であった。



事業名	ランチイベント テーマ「子どもの貧困」
日時	2018 年 12 月 18 日（火）12：35～13：15
場所	ボランティアセンター（青山キャンパス）
参加者数	2 名（学生 1 名、職員 1 名）
内容	ボランティア登録団体である NPO とインターンとして活動する本学生の協力を得て、「子どもの貧困」をテーマに東京都足立区の現状についてプレゼンしてもらった上で、 日本社会の現状課題と問題提起を行ったうえで、解決策としての NPO の活動を紹介する。またインターンとして活動する本学学生の参加動機、活動を通じた成功体験・失敗体験について語ってもらう。 スピーカー：認定 NPO 法人カタリバ アダチベース 永山 将樹 様 文学部英米文学科 2 年 松川さん
成果	実質的な参加者はゼロであったため、成果よりも課題が多く残った。参加数の少なさは内容というよりもボランティアセンターのイベント自体に対する関心の低さ、広報発信力の低さに起因すると思われるため、次年度以降は年度初頭オリエンテーション時に告知したり、ガイドへの記載、LINE @への加入、らいふいんアプリを活用するなど、潜在的関心層へのダイレクトな情報発信を試みる必要がある。
主催	青山学院大学ボランティアセンター
協力	認定 NPO 法人カタリバ

事業名	2018 年度防災 WEEK
日時	2018 年 12 月 10 日（月）～12 月 14 日（金）
場所	常設展示：青山キャンパス 1 号館ラウンジ及びボランティアセンター VR 防災体験（12/10、11）：中庭 防災セミナー（12/13）：17504 教室 防災ワークショップ（12/14）：126 教室
参加者数	常設展示：不明 VR 防災体験：12/10 358 名、12/11 373 名 防災セミナー：15 名（学生 7 名、教職員 5 名、渋谷区職員 2 名、IVYCS 社員 1 名） 防災ワークショップ：16 名（学生 14 名、教職員 1 名、講師 1 名）
内容	学生スタッフ Roote の防災プログラムと連動する形で、災害報道写真の展示や VR による防災体験の他、渋谷区防災課や本部安全対策課の職員を招き防災セミナーを実施した。最終日には災害救援ボランティア推進委員会の宮崎氏を招き、防災カードゲームをワークショップ形式で実施した。
成果	車両のインパクトから VR 防災体験の反響は大きく、2 日間で 700 名以上の方に参加してもらえた。大学生だけでなく設置学校の生徒や保護者の参加も多くみられ、地震災害の恐怖心を疑似体験ではあるが感じ取ってもらえた。一方、この企画が防災ウィークの一環であることの認知度は低く、Roote 企

	画のコンテンツの参加者数は伸び悩んだ。 少人数ながらも防災セミナーには学生以外にも教職員や IVYCS の社員が参加し、ワークショップには交換留学生 10 名が青山スタンダード授業の一環で参加した。本学教職員の中にも個人的に防災分野の関わりがある方がいることの発掘にもつながった。 VR というアトラクションで地震に対する注意は引き付けられたものの、その後の行動に繋がる興味・関心や欲求までのプロセスにはたどり着くことが出来なかった反省を生かし、次年度以降はより関心層に届く広報活動や魅力あるコンテンツ作り、参加しやすい日程設定などを検討していきたい。
主 催	青山学院大学ボランティアセンター
協 力	渋谷区防災課 渋谷消防署 災害救援ボランティア推進委員会



＜災害時対応について＞

ボランティアセンター対応基準

ボランティアセンターでは、近年多発する国内の自然災害への対応基準として 2018 年第 1 回ボランティアセンター運営委員会（6 月 28 日開催）で「遠隔地で発生した災害への支援について」を定めた。

今回の豪雨災害に関して、気概規模の大きさや岡山県総社市と本学の関係性を鑑み最高レベル（3 現地視察→学生派遣）までを視野に入れた支援を検討することとなった。

2018年度第1回ボランティアセンター運営委員会承認（6/28）

遠隔地で発生した災害への支援について

1 情報収集

- ・災害の詳細
- ・現地の被害状況
- ・他大学を含む外部の対応
- ・学内の各部局での対応状況

2 学生への情報発信

現地の安全性が確認できるまで現地での活動は控えるようにアナウンス
※発信者はボランティアセンター
※文面原案は使いまわせるよう考案予定

3 vcとしての対応判断

災害の規模に応じてvcの対応を決定（正副センター長判断）

- 0 支援なし
- 1 募金活動
- 2 物資支援
- 3 現地視察→学生派遣

4 対応判断に基づく支援活動等の実施

学内募金活動報告

【大阪府北部地震緊急募金】		
期 間	7月5日（木）～9日（月）（街頭募金は5日のみ）	
実施体制	青山キャンパス	学生スタッフ Roote
	相模原キャンパス	青山学院大学ボランティア団体ネットワーク（UN:LIMITED、SIVA ボランティア愛好会、fanxfun）、学生スタッフ Roote 相模原メンバー
募金総額	15,169 円	
寄 付 先	社会福祉法人中央共同募金会	

【西日本豪雨災害緊急募金】		
期 間	7月10日（火）～8月5日（日）（相模原は3日まで）	
実施体制	青山キャンパス	学生スタッフ Roote、宗教センター、短大宗教センター
	相模原キャンパス	学生スタッフ Roote、UN:LIMITED フィールドスタディ愛好会、SIVA ボランティア愛好会、国際ボランティア団体 fan × fun、宗教センター、缶バッチプロジェクト同
募金総額	556,590 円	
寄 付 先	NPO 法人 全国災害ボランティア支援団体ネットワーク	

【北海道胆振東部地震緊急募金】		
期 間	9月23日（日）、10月2日（火）、10月5日（金）、10月8日（月）、10月9日（火）	
実施体制	青山キャンパス	学生スタッフ Roote、体育連合会
募金総額	87,866 円	
寄 付 先	社会福祉法人中央共同募金会	



平成 30 年 7 月豪雨災害対応

1. 被害状況

「平成 30 年 7 月豪雨」により広島県、岡山県や愛媛県などの西日本を中心とした 15 府県で河川の氾濫や洪水、土砂災害などの被害が発生した。

本学と包括連携協定を締結している岡山県総社市も被害が出た地域の一つである。7 月 6 日から 7 日にかけて降り続いた大雨により市内を流れる高梁川の堤防数か所が決壊、国道 180 号線が冠水し昭和地区など広範囲で浸水被害が出た。6 日未明には下原地区にある朝日アルミ工場が爆発し、爆風で付近の民家などが全壊し、民家や店舗の窓ガラスが割れる被害が起きた。同市では 4 名が亡くなり、全壊から一部破損の家屋は 1,500 棟以上にのぼる。

今回の豪雨災害に関して、気概規模の大きさや岡山県総社市と本学の関係性を鑑みボランティアセンターが定めた「遠隔地で発生した災害への支援について」に基づき、最高レベル（3 現地視察→学生派遣）までを視野に入れた支援を検討することとなった。



(ア) 情報収集

7 月 9 日よりインターネットや SNS などを通じて、被災地支援状況など情報収集を開始。岡山県総社市側と本学の窓口役である災害対策本部長と連絡を取り合う。

(イ) 学生への情報発信

「遠隔地で発生した災害への支援について」に基づき、注意喚起のアナウンスを学生ポータル、教職員ポータル、ボランティア団体ネットワークメーリングリストに配信。

夏期休業期間中の災害ボランティア活動の可能性を視野に入れ、7 月 13 日に全学生、教職員に対し希望者を募集。締め切りまでに 46 名の学生・教職員からの申し込みがあった。視察を踏まえて活動時期を決定した後に最終希望者を募り、8 月 2 日には参加者を決定した。

(ウ) 募金活動

7 月 5 日から行っていた大阪北部地震の募金活動を 7 月 10 日より豪雨災害募金に切り替えて実施。



＜缶バッジ募金プロジェクト＞

相模原事務部の職員有志からなる缶バッジ募金プロジェクトメンバーが「西日本豪雨災害第3次缶バッジ募金」を実施した。同プロジェクトは2011年の東日本大震災の際に発足し、2016年の熊本地震に続き3度目の活動となる。缶バッジを1コイン以上の募金をしてくれた方に渡し、製作費以外の170,500円をボランティアセンターで募った西日本豪雨災害緊急募金に寄付いただいた。



缶バッジデザイン

(I) 物資支援

総社市災害ボランティアセンターのニーズに即した作業用具を現地に提供。加えて学院の災害備蓄用保存水 500 ミリリットル 390 箱とウェットティッシュ 106 箱もトラックで配送した。10 トントラックの積み荷作業には体育会レスリング部の学生はじめ教職員野球部、学生生活課職員が参加した。物資運搬には丸全昭和運輸株式会社様にご協力いただいた。

作業用具	
角スコップ	20個
鋤簾	30個
ハンドスコップ	30個
土嚢袋 (30枚入り)	30個
皮手袋	30個
PPロープ	30個
ポリバケツ	30個
ヘッドライト	25個
踏み抜き防止板入りリインソール	30個
支援物資	
あんしん保存水 (500mlx24本入り)	390箱
ウェットティッシュ	106箱



2. 学生ボランティア派遣

(ア) 視察

夏期ボランティア派遣へ向けて、活動のニーズ調査、宿泊拠点の確保、カウンターパートの確定等を行うため、コーディネーター2名、英語特区ボランティア事業で総社市に滞在経験のある学生2名で視察を行った。

(イ) 現地での活動

視察結果を受けて、夏期休業期間中のボランティア活動を決定。8月25日から9月6日にかけて学生16名と職員1名が2陣に分かれ、ボランティアコーディネーターが引率する形で実施した。

1 陣			2 陣		
8 月 25 日 (土)	13:00 13:30 夕方	総社駅集合 被災地視察（下原地区、 福谷地区）と草田地区の 方との談話 シェアハウス到着	9 月 1 日 (土)	13:00 13:30 15:30 16:00 17:00 夕方	総社駅集合 被災地視察（下原地区） 市役所挨拶 復興支援会議参列 草田地区の方との談話と 福谷地区の視察 シェアハウス到着
8 月 26 日 (日)	10:00 16:00	草田地区でボランティア 活動（漂流物の撤去） 草田地区の方との交流会	9 月 2 日 (日)	10:00 16:00	草田地区でボランティア 活動（漂流物の撤去） 草田地区の方との交流会
8 月 27 日 (月)	9:00 15:00 16:00	真備町でのボランティア 活動 市役所挨拶 災害対策会議参列	9 月 3 日 (月)	9:00 17:30	真備町でのボランティア 活動 総合福祉センターにてラ イブ運営の手伝い
8 月 28 日 (火)	9:00 15:00 16:00	真備町（5 名）、支援物資 の仕分け（2 名）の 2 チー ムに分かれてのボラン ティア活動 市役所挨拶 災害対策会議参列	9 月 4 日 (火)	7:00 AM 16:00 18:30	台風 21 号の接近に伴い活 動中止 シェアハウスで防災学習 （夕方から支援物資再開の 連絡あり） 支援物資仕分け作業 シェアハウスにて市主催 の夕食会
8 月 29 日 (水)	9:00 17:00	真備町（6 名）、支援物資 の仕分け（2 名）の 2 チー ムに分かれてのボラン ティア活動 シェアハウスにて市主催 の夕食会	9 月 5 日 (水)	9:00 13:30	昭和小学校グランド清掃 活動 西地区仮設住宅建設地付 の泥かき作業、および西 地区公民館の避難所見学
8 月 30 日 (木)	9:00 10:00 16:30	昭和地区仮設住宅建設地 鎮祭参列 昭和小学校グランド清掃 活動 昭和地区での夕涼み会に 参加	9 月 6 日 (木)	9:00 13:30 14:00	シェアハウス清掃 市役所挨拶 市職員の案内による観光 後、倉敷にて解散
8 月 31 日 (金)	8:00 10:00 11:00 13:00	シェアハウス清掃 市内観光 市役所挨拶 総社駅で解散			



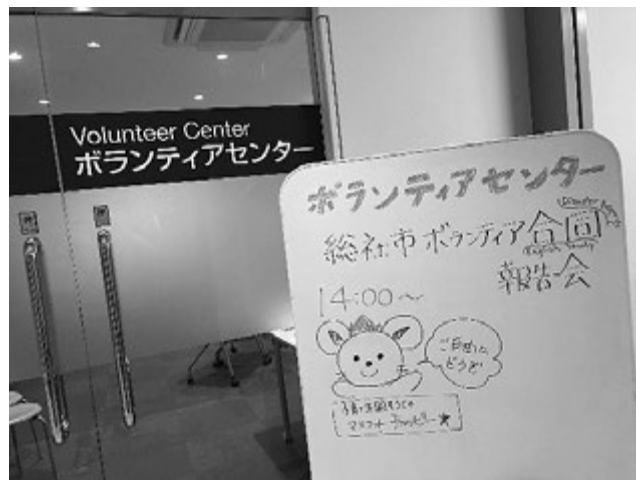
【参加者の所感】

- ・ボランティア活動を通じて、人の温かさに触れた。現地では全国から総社市に寄せられた物資や励ましのメッセージなどを見ることができた。また、ボランティアとして他の市を始め、他県からも参加をしている方々もいて、沢山の方が総社市の復興に貢献しようとしていることを痛感した。さらに、現地の方々が差し入れをくださり、温かく私たちを受け入れてくださり、助け合いや支え合いという人の温かさに触れられたボランティア活動であった。

- ・ボランティアをするということは、人の力になるだけでなく、自分自身の成長にも繋がると感じた。
- ・共にボランティアを協力して行う仲間の大切さ、1人では決して頑張る事が出来なかったと実感した。改めて、自分自身が直接現地に訪れ、五感を使って現状を知る事がいかに大切かを学んだ。
- ・行政の対応が良かった。行政と社協が連携しているからこそ、ボランティア活動が迅速に行動できたのではないかと、総社市の取り組みをみて実感した。
- ・メディアでの報道が少なくなっていることから、既に復興しつつあると思っていたが、実際はまだまだ復興には時間がかかることを知った。
- ・ボランティアを通して、活動一つひとつは微力だけど無力ではないことを学び、それらの積み重ねが復興への道だということを学んだ。

3. 合同報告会の開催

9月23日（日・祝）に開催された第25回青山学院大学同窓祭において総社市ボランティア合同報告会を行った。豪雨災害の災害ボランティア活動の参加学生3名と英語特区ボランティアプログラム参加学生4名それぞれが現地での活動内容やボランティアを通じて学んだこと、気づいたことを発表し、最後は学生という立場で出来ることを提案する形で締めくくった。



＜学生ボランティア団体メーリングリストの開設＞

2018 年度から学生スタッフ以外の学生ボランティア団体（公認団体、インカレ団体、有志団体など）の活性化を目的とするメーリングリストを開設した。ボランティア活動に有益なイベント・セミナーや助成金情報、学生ボランティアシンポジウムなどの情報提供を行っている。また、加入団体はボランティアセンター発行の小冊子への団体紹介や新年度の合同イベントの参加など様々な特典が得られるような制度を整えた。2018 年度の登録団体は次の 7 団体。

僕らの夏休み Project 青学支部
UN:LIMITED
チャリティー & ボランティア ANIMO
トライアングルボランティア愛好会
SIVA ボランティア愛好会
TsunAGU ボランティア愛好会
ユース・フォー・大船渡

3.2 AOYAMA VISION 推進事業

相模原キャンパスでのボランティアセンター開設および活動スタートアップ

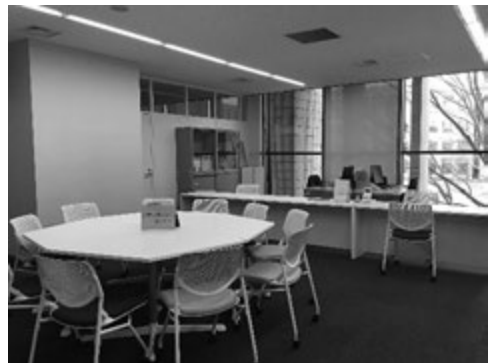
「ボランティアセンター相模原キャンパスの開設と今後の取り組みについて」

報告者：三神 憲一（ボランティアセンター助手）

2016 年 10 月の青山キャンパスボランティアセンター開設に続き、2018 年 4 月、相模原キャンパスにボランティアセンターが開設しました。開設の前段階として、2017 年度には関連部署との調整等、設置準備作業が進み、専属のボランティアコーディネーター 1 名が配置されました。開設にあたっては青山キャンパスのセンター運営業務を継承し、また、キャンパスを越えて幅広いボランティア機会が提供できるよう、ボランティア・プロジェクト・サポート制度等の事業を両キャンパスの共通事業として実施することになりました。一方で、相模原キャンパスの地域性（立地）を反映したボランティア活動や、独自性のあるボランティア企画を実施するために、相模原キャンパスの学生へ向けたアンケート調査の実施や、相模原市社会福祉協議会等の中間支援団体へうかがい、情報収集を行いました。実施した事業については、「3.1 ボランティアセンター主催事業」、「3.4 共催・協力事業」をご参照ください。

なお、後期に入ってから、2019 年度より開講されるサービス・ラーニングパイロット科目（青山スタンダード）の準備として、ボランティア活動の受け入れ先の開拓も行いました。このような取り組みを通して、地域の NPO の方々との関係も少しずつですが構築されました。今後はこうした繋がりを大切に、ボランティア活動を促進させる発展的な取り組みを様々な形で実施できるよう、計画していく予定です。

また、2018 年度は B 棟 1 階スチューデントセンター内にてボランティアセンターを運営してきましたが、2019 年度からは学生にとってより利便性の高い F 棟 2 階に場所を移し、その機能の拡充を図ります。



相模原キャンパスのボランティアセンター（F 棟 2 階）

教職員ボランティア活動補助プログラム

青山学院大学ボランティアセンターは、学生のみならず、教職員が社会貢献活動を体験することにも支援・促進していく組織です。開設から 1 年半を迎えたボランティアセンターでは、2018 年度あらたに、教職員の自発的な社会活動への参加を促進するための事業を開始しました。社会活動に参加した教職員に対し、条件を満たした場合、交通費の一部支給など、費用補助を行います。

2018 年度は 8 名の教職員がこのプログラムを利用しました。

1. 対象者

専任教職員

2. 対象となる活動

- (ア) 短大との連携プログラムである岩手県宮古市でのボランティア活動
- (イ) 東京ボランティア市民活動センター主催「夏の体験ボランティア」への参加
- (ウ) ボランティアセンター発信情報への直接参加
ボランティアセンターが提示する学外活動（HP 参照）に参加した場合
- (エ) 外部団体が企画するボランティア活動への参加
ご自身で探してきたボランティア活動への参加 ※活動を伴わないセミナー・勉強会は除く

サービス・ラーニングパイロットプロジェクトへの協力

青山学院として掲げる中長期的な事業計画である AOYAMA VISION においてサービス・ラーニング（以下、SL）は大学の ACTION のひとつとして位置付けられている。ボランティアセンターからは、その中核的なプロジェクトである SL パイロットプロジェクトには 3 名のメンバーを派遣した。

<背景>

ボランティアセンター開設を受けて、大学におけるサービス・ラーニング導入に向けた検討委員会（SL 検討委員会）を設置。

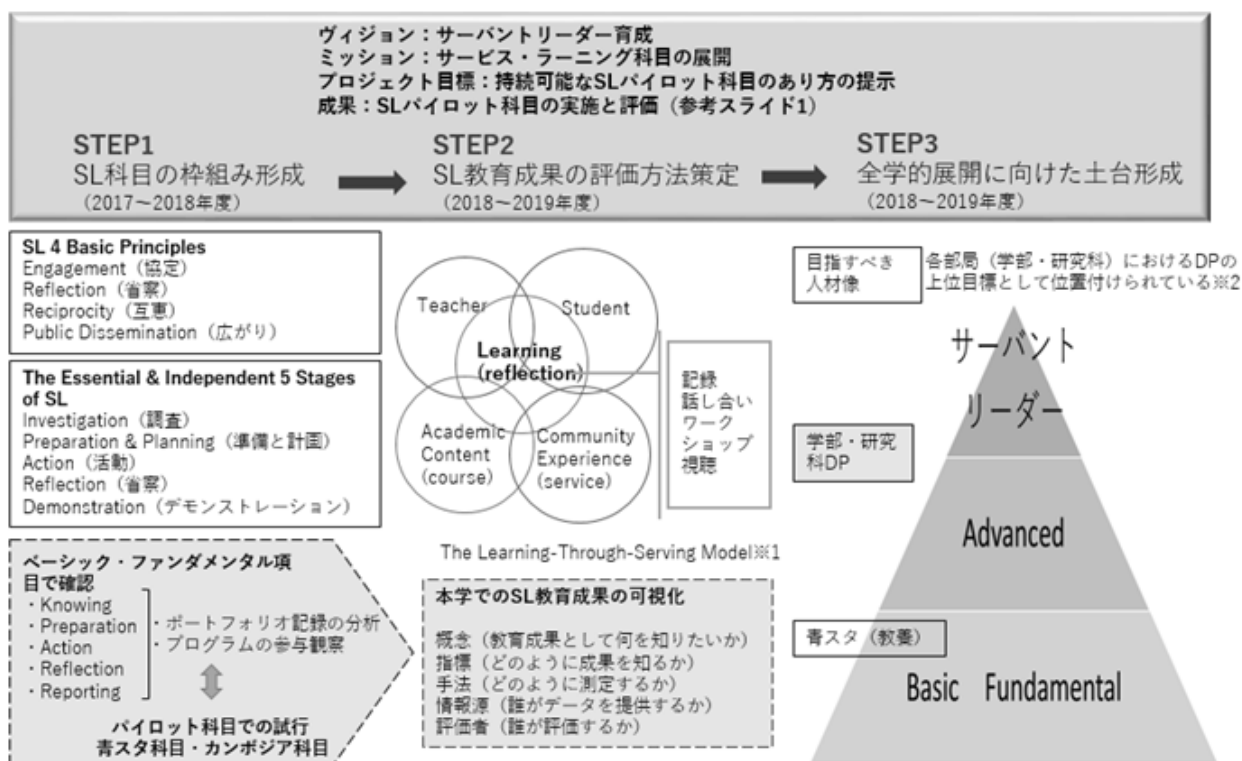
「SL 検討結果報告書」での提言を受けて大学執行部にて SL 科目を試行的に取り組むことを決定。

<目的>

AOYAMA VISION に掲げるサーバントリーダー育成のための具体的な手法としてサービス・ラーニングの正課での活用を図り、持続可能な SL 科目のあり方を提示する。その中で、以下の成果を示す。

- ① 運用ノウハウの蓄積・課題の抽出
- ② 教育成果の評価方法の策定・教育成果の可視化

<プロジェクト概要>



※1 Cress, C. M. (2013) What is Service-Learning? In C. M. Cress (Eds.), Learning through Service: A Student Guidebook for Service-Learning and Civic Engagement Across the Disciplines. Stylus Publishing Inc.

※2 3ポリシー策定の考え方と残された課題 3ポリシー策定プロジェクト (2016.12.2)

サービス・ラーニング教材の制作・発行

『サービス・ラーニング リフレクションハンドブックー深い学びとであうためにー』

青山学院大学サービス・ラーニング・パイロットプロジェクトでは、サービス・ラーニング・ネットワーク評価研究チームとの協力により、サービス・ラーニングにおけるリフレクションを通じた学びに重点をおいた教材を制作した。

内容

- ① フィールドワークの事前から事後を通じた学習のプロセスで、学生が実際に書き込めるハンドブック。
- ② アメリカ等のサービス・ラーニングの理論や枠組みを生かしながらも、日本の大学におけるサービス・ラーニングのデザインや実践者による構想、編集での構成。
- ③ サービス・ラーニングをはじめて取り組む教職員や学生が学習に取り組めるよう、学部授業を想定した構成。

使用予定

2019 年度 4 月に発行し、青山スタンダード科目としてパイロット的に実施する、「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」（相模原キャンパス）科目の履修学生への配布及び授業内での活用を行う。また、ボランティアや正課外活動を含む地域社会での活動に参加する学生への配布と活用を予定している。

サービス・ラーニング学習会報告

日時 12 月 7 日（金）18 : 00 ～ 20 : 30

場所 青山学院大学 総研ビル 9 階第 16 会議室

協力 サービス・ラーニング・ネットワーク（評価研究チーム）

司会 高橋良輔 教授（青山学院大学地球社会共生学部、ボランティアセンター副センター長）

参加者

全体 22 名

学内者 11 名、学外者 11 名

実施内容

1. ポートランド州立大学（PSU）での研修「コミュニティ・ベース教授法ワークショップ」報告

報告者：中尾匠吾・秋元みどり

- ・コミュニティ・ベースド・ラーニング（CBL）関連情報の共有：宮副謙司教授
- ・コミュニティ・ベース教授法ワークショップ過去参加者からの情報共有

2. サービス・ラーニングのリフレクションを深める

発表者：秋吉恵（立命館大学）、市川享子（東海大学）、山田一隆（岡山大学）、秋元みどり

- ・サービス・ラーニングにおけるリフレクションの重要性
- ・他大学におけるサービス・ラーニングの学修成果を評価する取り組み
- ・「リフレクションハンドブック」作成と内容の紹介、活用の仕方

3.3 青山学院内連携事業

事業名	岩手県宮古市オール青山
日時	2018年8月3日（金）～6日（月）
場所	岩手県宮古市田老
参加者数	計70名（内、青山学院大学教職員5名）
内 容	岩手県宮古市を訪れていた青山学院初等部生とご家族、高等部生、女子短期大学「Blue Bird」、青山学院大学「MF3.11」のメンバーに教職員を加えた総勢70名が青山学院宮古応援チームとして集結し、8月4日（土）「グリーンピア三陸みやこ夏まつり」を開催。地域の方々と交流を深めた。5日（日）には「重茂味まつり」の手伝い、6日（月）は鉾ヶ崎公民館にてバザーの手伝いをBlue Birdの学生と共に行った。ボランティアセンターとして本事業に参加する教職員に対し、教職員ボランティア活動補助プログラムの提案を行った。
実施主体	青山学院高等部、女子短期大学「Blue Bird」、青山学院大学「MF3.11 東北応援愛好会」

事業名	国際協力プランナー入門
日時	2018年9月12日（水）～14日（金）
場所	青山学院女子短期大学 N棟多目的室
参加者数	5名
内 容	青山学院女子短期大学の科目「共生社会実習」の一つとして位置づけられている3日間の集中ワークショップに大学生が参加した。途上国の児童労働問題をテーマとする教材を利用して、その問題を引き起こしている原因や解決手段についてプロジェクトデザイン手法を用いて学んだ。最終日には自分たちのアクションプランを発表した。
実施主体	青山学院女子短期大学 特定非営利活動法人 ジーエルエム・インスティテュート

事業名	コーヒーを通じた国際協力～東ティモール VS タイ コーヒーで村おこしディスカッション～
日時	2018年10月4日（木）放課後
場所	青山学院高等部
参加者	青山学院高等部の生徒16名、教職員5名、大学教職員2名
内 容	高大連携促進活動の一環として、高等部にて開催されたGlobal Week IIへ、ボラサポに採択された団体が参加した。東ティモールのフェアトレード・コーヒーについて自主的に学習している団体BLUE PECO（高等部）と、タイ北部山岳地域有機コーヒー農家支援プロジェクト（大学）の活動報告をはじめ、お互いが対象としているフィールドからみえてくる国際協力について、活発な議論が行われた。また、東ティモールコーヒー、タイコーヒーの試飲会を行った。
実施主体	青山学院高等部

3.4 共催・協力事業

事業名	渋谷区第 19 回せせらぎまつり
日時	2018 年 5 月 13 日（日） 10：00～15：30
会場	渋谷区総合ケアコミュニティ・せせらぎ
内容	渋谷区社会福祉協議会、ボランティアセンター主催の地域福祉イベント。Roote 地域連携部が 2017 年度に出展。今年度は活動紹介の範囲を広げ、あすなろホーム（陸前高田活動先の商品）のお菓子やブルーシードバック（熊本支援）なども販売。
スケジュール	4/18 参加団体説明会出席 4/18 当日運営ボランティア募集情報をセンター HP に掲載、イベントチラシの掲示 5/13 地域連携部メンバー中心に当日運営
成果	Roote 新スタッフ 3 名を含む 10 名が当日のブース運営に従事。今年は販売物の影響が昨年よりも多くの方がブースに立ち寄ってもらえた。 次年度は展示物での活動紹介のほかに配布物なども制作できると出展する意義が高まると思われる。
主催	第 19 回せせらぎまつり実行委員会（しぶやボランティアセンター）

事業名	全国 NGO スタディツアーフェスタ 2018・海外ボランティア合同説明会
日時	2018 年 5 月 29 日（火） 15：00～19：00
会場	17 号館食堂（青山キャンパス）
参加者数	60 名（推定） / アンケート回答数 20 件
内容	スタディツアー・ワークキャンプを実施している国際協力 NGO 及び海外ボランティアの合同説明会。今年は国際協力 NGO17 団体が出展。SDG s をキーワードにブース配置する。
成果	今年度は学生数の多い火曜日開催とした。また、昨年の反省を踏まえて総合インフォのデスクを配備したり、会場の入り口をオープンにしたことにより印象ベースではあるが、来場者数は昨年より多く、各ブースで熱心に話を聞く参加者が多く目についた。一方で、体験者発表等のプログラムを授業の合間の時間帯の設定にしたが、あまり参加者の関心は高くない様子であった。
共催	スタディツアー研究会、青山学院大学ボランティアセンター



事業名	「夏の体験ボランティア 2018 キャンペーン」ガイダンス
日時	6月7日（木）19：00～20：00
会場	17406 教室（青山キャンパス）
参加者数	当日の参加者 14 名（内職員 1 名）、資料のみ 4 名（内職員 1 名）、関係者 10 名 / アンケート回答数 9 件
内 容	東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）が毎夏実施している「夏体験ボランティア」の大学キャンパス内ガイダンス。昨年同様 TVAC や地域ボラセン、受け入れ団体 4 団体が本学に出向いて説明を行う。メインターゲットは本学の学生・教職員であるが一般の方も参加可能。今年度から開始する AOYAMA VISION 推進事業である「ボランティアプログラム教職員参加機会の拡充」対象の活動となる。
成 果	開催曜日、時間帯は昨年同様であったが最終的に参加者は昨年より減であったものの、熱心に夏ボラの応募方法や受け入れ団体の発表を聞いていた。参加者アンケートにも好意的なコメントが寄せられた。 <参加者からのコメント> ・活動場所がたくさんあり、選びやすい。ぜひ参加してみたい ・夏ボラという言葉を知っただけでも来た意味があった。たくさんのプログラムがあるので自分に合うものを探すのは大変そうだなと思った。 ・どのイベントもとても素敵だと思う。予定を合わせて参加したい。
主 催	東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター
共 催	青山学院大学ボランティアセンター、しぶやボランティアセンター



事業名	英語 / 異文化コミュニケーションキャンプボランティア募集
日時	1) 7/26 (木) ~ 7/27 (金) Shibuya English Camp (A) 2) 7/30 (月) ~ 7/31 (火) Shibuya English Camp (B) 3) 9/8 (土) ~ 9/9 (日) 近隣語異文化交流 Camp 4) 10/5 (金) ~ 10/6 (土) 笹塚中 English Camp 5) 9/22 (土) * ロシアの言葉と文化を学ぶ
会場	千葉県勝浦市 ブルーベリーファーム * は渋谷区原宿外苑中学校
参加者数	2 名
内容	関東国際高校が例年実施しているサマーキャンプへの大学生参加者を募集し、今年度は 2 名の申し込みがあった。
主催	関東国際高校

事業名	相模原市第 30 回大野北銀河まつり
日時	8/4 (土) 12:00 ~ 17:00 8/5 (日) 11:00 ~ 17:00
場所	相模原市鹿沼公園
参加者数	17 名
内容	相模原キャンパスの地域貢献活動の一環として、理工学部・長先生の研究室の学部生・院生が中心となり、子どもを対象とした入浴剤の製作が体験できるブースを出展した。ボランティアセンターでは理工学部以外の学生への呼びかけと事前説明会の開催、実施前日の準備～撤収作業までの一連の作業をサポートした。
成果	猛暑炎天にもかかわらず、両日でおおよそ 180 名の子供たちが、学生の指導のもと各々の好きな色、好きなデザインの入浴剤づくりを楽しんだ。「早くお家に帰ってお風呂に入れてみたい」との期待の声が多く聞かれた。これまでも学生が有志で大野北銀河まつりへ参加していたが、大学として、企画に出展したのは初めてとなった。
実施主体	青山学院大学 理工学部 長研究室



事業名	渋谷区総合防災訓練
日時	2018年9月1日（土）
場所	代々木公園
参加者数	2名
内容	渋谷区が毎年実施する総合防災訓練において、警視庁の災害ボランティアとして救助者の救出・救助活動を行った。希望者を学生ポータルで募ったところ、2名の学生が参加した。
協力団体	警視庁渋谷警察署

事業名	総社市英語特区ボランティア募集
日時	2018年9月10日（月）～14日（金）
場所	岡山県総社市内の幼稚園、小・中学校
参加者数	7名
内容	包括連携協定に基づいた英語特区、総社市との英語ボランティアプログラム。今年度の定員は7名であったが、一次募集ですぐに定員に達した。参加学生の内訳は4年生3名、3年生2名、2年生2名で、内3名は昨年も参加したリピーターであった。実際の活動は5日間、総社市内の幼稚園および小中学校4カ所で英語学習の支援活動を実施した。
成果	リピーターもいたことから活動前からメンバー間で連絡を取り合うなど、学生間の情報共有が頻繁に行われていた。 学生たちの事後レポートからは学校現場での教育支援活動だけでなく、教育の本質や地域の特性への気づきなど、それぞれの視点で得るものがあり、今後の進路に有益であったという意見が多くみられた。
共催	岡山県総社市、青山学院大学ボランティアセンター



岡山県総社市にある
Soja city Special English Education
**英語特区でボランティアを
しませんか？**

子ども好き！
英語好き！！

**学生ボランティア
募集！**

ごあんない

岡山県総社市は、人口約6万8千人の普通の地方都市ですが、なんと、片岡聡一市長は青山学院大学出身。青山学院大学と総社市は包括連携を締結し、平成27年度から、学生ボランティアの受け入れを行っています。

総社市にある昭和地区には「英語特区」があり、幼稚園から中学校まで特色ある楽しい英語の授業が行われています。全国的にも注目されているこの英語特区に来て、幼児児童生徒と一緒に楽しませんか？

平成27年度ボランティア活動の様子

総社市立昭和小学校

留学生も大歓迎！ Let's enjoy English！

事業名	外国にルーツを持つ子どもの学習支援について
日時	① 2018 年 12 月 4 日（火）18 時 30 分～ 20 時 ② 2018 年 12 月 8 日（土）10 時～ 12 時
会場	① F 棟 2 階グローバルラーニングコモンズ ② 相模女子大学茜館
協力団体	神奈川県立相模原青陵高校、弥栄高校、NPO 法人 ME-net
内容	相模原地域に暮らす外国人の教育環境について、多文化学習支援センター CEMLA の活動を中心に説明を行った。また、CEMLA の活動拠点である相模女子大学茜館を訪問し、ボランティア活動を体験した。
参加者	7 名（理工 4 名、社会情報 1 名、地球社会共生 2 名）
参加者の感想 （抜粋）	・外国につながるのがある子どもが日本でどのような状況にあるのか、また自分がその子たちのためにできることがあればやりたい。 ・学習者の親がどのようにセムラを知り、子どもを通わせるのか気になった。 ・説明に動画などもあって分かりやすかった。 ・「国内の国際化」ということを学部の授業で学び、興味を持った。
所感	参加人数は少なかったが、関心のある学生を活動現場へ繋げることができたという点では活動実施の促進がなされたと考える。また、本企画の実施を通して、上記協力団体との今後の連携体制の基盤が整備された。 なお、終了時に 2019 年度開講の青山スタンダード科目「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」を紹介したので、参加学生が履修することを期待したい。
共催	多文化学習支援センター CEMLA、青山学院大学ボランティアセンター

事業名	平成 30 年大学間連携災害ボランティアシンポジウム 「災害の時代と大学、そしてボランティア」
日時	2018 年 12 月 15 日（土）10 時 50 ～ 16 時 30 分
会場	東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
参加者数	ボランティアセンター学生スタッフ Route 2 名 SIVA ボランティア愛好会 2 名
内容	リレートークならびにパネル展示にボランティアセンター学生スタッフとして参加。Route の団体紹介と活動報告を行った。また、ボランティア団体ネットワーク加盟者へ交通費補助を呼び掛け、SIVA ボランティア愛好会の学生 2 名が参加した。 参加学生の感想（抜粋） ・災害は災害が起きた時の社会の問題を顕在化させるという言葉にとっても共感した。 ・リレートークで各校の活動内容を聞いて、どの大学も主にしている軸は同じだと気付いた。 ・普段のボランティア活動で自分たちが何を何の目的でどのように行っているかを明確化し、社会に理解してもらうことを重要視していきたい。 ・同年代で同じような活動をしている人と関わることができた。同じような考えを持っている人もいれば、まったく違う考えの人もいて、当然日々の生活では両者の意見を聞くことはなかなかない。本シンポジウムにて日々のボランティア活動について見直すきっかけとなった。

主 催	東北学院大学災害ボランティアステーション 復興大学災害ボランティアステーション 大学間連携災害ボランティアネットワーク
-----	---



事業名	仙北市冬季交流プログラム
日時	2019年2月14日(木)～17日(日)
場所	秋田県仙北市
参加者数	12名(ウェブエントリーは15名)、引率者2名
内 容	包括連携協定に基づく交流事業の3回目を実施。活動内容は雪まつりの準備、除雪作業、雪まつりイベントの手伝い、風土・伝統文化理解及び地域住民との交流など。今年度は事前研修機会を設け、テーマを各自設定した上で活動に参加し、活動後にはレポートを提出した。
スケジュール	11月下旬 開催日程、実施内容の決定 12月5日 学内広報開始 1月16日 事前研修 2月14日～17日 プログラム実施 ～2月末 事後レポート提出
成 果	事前研修を実施したことから参加者同士が事前に情報共有できた。一方で課題に関しては期末試験前ということもあり、取り組み状況は学生間でばらつきがあった。 プログラムは、過去2回実施してきた中で最も学習要素の強い内容であった。中には除雪作業など、体力仕事のボランティア活動に大きな期待を持った学生もいたが、市職員との懇親会では地域の現状課題や自治体職員の業務について学ぶ機会となるなど、全体的には満足度の高いものとなった。 事後レポートのテーマとして、「仙北市の豊かな観光資源の有効活用」や「方言」、「海外からの観光客や実習生などインバウンドの取り組み」などが扱われた。
共 催	秋田県仙北市 青山学院大学ボランティアセンター



事業名	渋谷区こどもテーブル
日時	2017 年 12 月から随時
場所	各こどもテーブル活動先
参加者数	30 人（申込者）2018 年 4 月～2019 年 3 月集計
内 容	渋谷区社会福祉協議会が実施する「こどもテーブル活動助成」を活用した活動先 14 か所に対する学生ボランティア募集の告知協力。 <活動紹介先> ・ なっつの木（学習支援、レクリエーション、おやつタイム） ・ 代々木こどもテーブル～春の小川～（学習支援補助） ・ 2020 年東京オリンピックに向けて英語を学ぶ会（学習支援補助） ・ 原宿こどもテーブルゆめとぴあきっちゃん（調理補助、学習支援、子どもと遊ぶ、イベント運営） ・ パール子どもテーブル活動（学習支援、子どもと遊ぶ、一緒に食事） ・ 恵比寿じもと食堂（こどもと遊ぶ、近隣の畑で収穫手伝い） ・ 上富ダイニング（宿題の手伝い・子どもと遊ぶ・調理する子どもの見守り） ・ リフレッシュ氷川こども食堂（子どもと遊ぶ・簡単な調理補助） ・ Mama's kitchen（調理補助・子どもと遊ぶ、食事・イベント運営） ・ スマイルキッズテーブル（子どもと遊ぶ、宿題をみる、一緒にご飯を食べる） ・ 子どもと一緒に遊び隊（サマーキャンプ、料理・工作教室、科学実験等を企画・主催・運営） ・ なな色カフェ（調理補助、子どもと一緒に遊ぶ、イベント運営） ・ おんがく な・か・ま（音を楽しむ♪音で繋がる♪を合言葉に音楽を軸としたイベント企画を運営） ・ 渋谷のラジオの教室こどもテーブル（アートで楽しく子どもと遊ぶ、イベント運営、学習支援）
主 催	渋谷区社会福祉協議会
	渋谷区  こどもテーブル KODOMO TABLE

4. 学生ボランティアプログラム

Roote について

Roote のビジョン

社会問題に対して自ら行動できる青学生を増やし、すべての人々が協力し合い助け合える社会を目指します。

Roote のミッション

社会問題に関心がある青学生と、ニーズを抱える社会をつなぎ、一人ひとりの思いを行動に変えます。



組織について

プロジェクト運営を担う東北部、地域連携部、国際協力部、災害支援部と業務運営を担う総務課、広報課、渉外課によって構成されています。

2018 年度プログラム活動一覧

6 月	【福祉】えびす青年教室一般参加者募集
7 月	【食品ロス】講演「食品ロス SOS」
8-9 月	【塩竈】学童保育・けやき教室、コラソン・浦戸諸島支援・サマースクール・PR プロジェクト 【陸前高田】コミュニティ活性支援・福祉支援 【熊本】観光プロジェクト・農業プロジェクト 【インドネシア】衛生教育 【フィリピン】モリングを使用した商品開発
10 月	【食品ロス】小盛カード
11 月	【食品ロス】食育活動 in 初台キッズ食堂 【福祉】えびす青年教室一般参加者募集
12 月	【防災】防災 Week 【福祉】出張えびす

2019 年

2 月	【ネパール】清掃活動・衛生教育 【塩竈】学童保育・けやき教室&コラソン
3 月	【陸前高田】コミュニティ活性支援・福祉支援 【熊本】農業プロジェクト

陸前高田プログラム

「コミュニティ活性支援」プロジェクト

活動場所：二日市仮設住宅・大野災害公営住宅・田端災害公営住宅

湊地区公民館・上ノ坊公民会

活動期間：夏期活動 2018 年 8 月 6 日(月)・9 日(木)・10 日(金)、春期活動 2019 年 3 月 12 日(火)
～ 14 日(木)

参加人数：夏期 4 名（学生スタッフ 1 名、一般学生 3 名）、春期 4 名（学生スタッフ 2 名、一般学生 2 名）

【活動背景・活動目的・活動内容】

陸前高田市の近年挙げられている問題として「お年寄りの孤独死」がある。この原因のひとつがコミュニティの破壊である。元々住んでいた家が津波により破壊されてしまったため、多くの住民が仮設住宅への転居を余儀なくされた。また復興が進むにつれ、仮設住宅から災害公営住宅や高台に新しく家を建てて転居する方が増えた。このことにより二度のコミュニティの破壊が起こってしまった。二度の破壊により新たにコミュニティを作ることに疲れを感じるお年寄りが増え、地域コミュニティを自らの力によって作るのが困難になってしまった。そのため、復興支援連絡会さんが主催するお茶っこに参加することによって隣同士のつながりを作っている。しかしそれにも限界があり、参加者が限定され、参加者の増加が難しくなっている。そこで我々大学生がお茶っこに参加することで、大学生が来るということをきっかけに新たな参加者を呼び込み、たまにしか来ない参加者が定期的に来るきっかけを与えることが目的である。また陸前高田市は多くの住民がなんらかの被害に遭っているため、震災の話を周囲に話すことが困難な状況にある。そのため外から来た我々に震災の話をすることによって、「震災時に助けてもらったお礼がしたい」と思っているお年寄りの方々に役割を与えることができる。活動内容はお年寄りとお菓子やお茶を食べながらお話を聴いたり、歌を歌ったり、ストレッチをすること。

【スタッフの所感】

夏の活動では 3 カ所の仮設住宅・災害公営住宅にお邪魔し、お茶っこ支援を行った。陸前高田市気仙町に位置する二日市仮設は年内の取り壊しが決定しており、お茶っこ参加者は仮設住宅から高台の新居や災害公営住宅に移転された方が主であった。一方で田端公営住宅や大野公営住宅はその公営住宅や周辺の戸建て住宅に住んでいる方が主な参加者であった。お茶っこの参加者がそれぞれ自分の畑で作った野菜を調理して作ったお新香や心太などをごちそうになった。お年寄りの方との会話の中で印象的だったのが、「震災もひどかったが、戦争よりはまし」という言葉だ。震災はこの町の全てを破壊し、日常を奪っていった。しかしその大津波よりも戦争の方がひどかったから、今はそこまで苦ではないという発言は長いときを生きた方々にしかしえない発言であると感じた。東日本大震災の被害は人それぞれであるから一概にはいえないが、そういう捉え方もあるのだと学ぶことができた。

春の活動では 3 カ所の仮設住宅のお茶っこに参加した。そのうちの 1 つ大野公営住宅は今年の夏にもお邪魔したところであり、前回の訪問を覚えてくださる方がいらっしやったのが非常に嬉しかった。活動 5 日目の 14 日にお邪魔した上ノ坊公民館では長年開催されていなかった盆踊りを震災後若い人たちが中心になって復活させた地域の公民館ということもあり、今年の盆踊りの写真が壁一面に展示されており、その写真を見ながら、お年寄りの方々が楽しそうにそのときの様子をお

話ししてくださったのが印象的だった。また津波の影響で自宅が流され上ノ坊地区に移転された方からは、周りの元々の住民の方々が温かく受け入れてくれたから今こうして楽しく暮らすことが出来ているとおっしゃっていた。地域コミュニティは我々が想像する以上に固いものでありその中によそ者が入っていくことは勇気が必要なことである。しかしそれを受け入れたこと、受け入れられたことによりそのコミュニティがより強固なものになったのではないかと感じた。

【参加者の所感】

事前研修やスタッフの話の中でコミュニティに馴染めないことがあるとは聞いていたが、実際に災害公営住宅のよく話した隣の方からみんなと馴染めないから畑も借りられないしその辺に座っている人しか知らないの、というようにおっしゃっていて直にそうした現状を感じて複数回訪れるとそのたびに気づかされることのあるのだと考えさせられた。また、新しい住処として建てられた家々で新しいコミュニティを作っているというのがイメージであり、実態もそういったものだと思っていたがそのすべてが利用されているわけではなく、利用されている方々も費用の面や利便性において生活しづらさを抱えていることがたくさんあるという現実を垣間見ることができた。そうした話から、復興というのは人が住める家やまちをただ作り直すだけではなく、何年も生活していけるように考えていくことはとても難しいことであると感じた。

お茶っこは一見ただの集まりだけれども、実際はそこでの会話を通して、お年寄りの方々が元気になって、辛いことも多く経験したのかもしれないが皆笑い合えるようになって本当に良かったと感じた。活性化するためには、いろいろ考える必要があり、簡単には言えないが、行う価値はあると感じた。

お年寄りに元気を与えるどころか、話していると自然と笑顔が溢れてしまうぐらい私たちが元気を貰った。ひとつ反省をするならば、楽しくお話はできたものの震災の話を聞くことが出来なかったことだ。もしも、まだ震災に対し思うところがあつたらと思うと話題に出すことが出来なかった。今考えると、その危険を踏まえてでも今後のためにお話を聞くべきだったのではと感じた。しかし様々なお話が聞けて有意義な時間を過ごすことができた。

【今後の展望】

今回の活動にて「復興支援連絡会」が主催するお茶っこへの参加という形を取ったが、お茶っこに参加していない地域の方へのアプローチが必要と感じた。お茶っこに参加し、横の繋がりを作ることができた人がいる一方、引きこもり状態で誰とも接しない状況にある方が今もまだ存在することを知り、このままでは地域課題である「孤独死の減少」は解決困難である。今後は外に出ることができないお年寄りに対して、どのような形で接することで他住民と関わりをもってもらえるかを検討していきたい。



「福祉支援」プロジェクト

活動場所：障害者就労継続支援事業所あすなろホーム

活動期間：夏期活動 2018 年 8 月 6 日（月）～ 11 日（土）、春期活動 2019 年 3 月 12 日（火）～ 14 日（木）

参加人数：夏期 4 名（学生スタッフ 3 名、一般学生 1 名）、春期 1 名（学生スタッフ 1 名）

【活動背景・活動目的・活動内容】

本プロジェクトでは、障がいのある方々が企業に就労したり起業するための知識やコミュニケーション能力を得るための施設、あすなろホームで主に活動している。利用者の方たちはこの施設でお菓子の製造、販売やその他食品の加工そして工場の部品製造、ふるさと納税返礼品の仕分けなど職種の異なる幅広い仕事に分担して取り組んでいる。これらの仕事をこなすときや休憩時間の利用者同士、また職員とのコミュニケーションが大事になる。しかし、現実では初対面の相手と話さなければならぬ機会もあるため、本プロジェクトにて施設内の話し慣れた相手だけではなく、学生ボランティアがその相手として、利用者の方々にとってよい刺激になることを目的としている。

あすなろホームでは主に利用者の方たちの仕事のお手伝いをしている。通期を通して行われるわかめの下処理加工。この作業は海藻サラダや莖わかめになるわかめの切断や不要な部分の切り落としを行っている。これは立って行う作業であり、話しながらでもできるので利用者の方々とコミュニケーションをとれる大事な仕事だ。他にはお菓子の製造・販売、この施設では人気商品のシフォンケーキを含んだ約 10 種類のお菓子を作り、市役所など近くの施設に一角を借りてその販売をしている。お菓子の製造は精密さを必要とするので、わかめの作業とはまた違った緊張感のある現場である。利用者さんたちは皆真剣にとりくんでいるので私達も真剣に作業に取り組んでいる。

【スタッフの所感】

私はこの 1 年を通して夏期、視察、春期と計 3 回あすなろホームさんにお世話になっているが、利用者の方々の私への対応の変化を少しずつ感じている。利用者の方たちは一人ひとり個性が強いので、喋るのが大好きな方や、自分からはあまり声を掛けられない方もいる。初めてここへ来たときは前者の方々とよく話し、後者の方々は私が話しかけても返答がもらえず正直悲しかったが、日を追い、訪れる回数を重ねるごとに私の問いかけに耳を傾けてくれるようになり、春期の活動から答えてくれるようになった。心を開いていただけたと感じると本当に嬉しかった。この経験も経てその利用者さんには初対面の方とのコミュニケーションをとっていただきたいと思う。

また、全体を通して感じたことはオンとオフの切り替えがはっきりしている点だ。休憩時は大声を出して話し、笑い、仕事が始まると真剣に取り組む彼らの何が私達と異なるのだろうか。彼らは私達と変わらないと思う。しかし、一度も接したことのない人はそのことに気づかずに彼らに対して壁を作ってしまう。それは残念なことだとこの活動から思うようになった。

【参加者の所感】

単純作業の中で利用者の方が自分の役割を全うする姿、工作中と休憩中のオンとオフの差の大きさを目の前にし、自分もその中で一緒に働けたことで、労働の楽しさや真摯に物事に取り組む大切さを学んだ。販売のお仕事をしたときには、来てくださるお客さまがあすなろホームのことをよく知っている方たちばかりで、地域同士のつながり、顔見知りの存在の多さを改めて感じた。あすなろホームには、年齢だけでなく本当に様々な方が同じ場所に集まって日々生活、お仕事をしています。その中で短い間ではありますが、一緒に過ごせたこと、関わったことは今後の自分の人生にとってとてもプラスになったと思う。

【今後の展望】

今後もこの活動を続けていく方針である。理由は利用者さんに刺激を与えること、そして一般の学生に障がい者に対する認識を変えてもらうことにある。少しでも障がいのある方と同じ視点を持てる人を増やしたい。だが、この活動は先が見えないという難点があり、ただ続けていてもマンネリ化してしまうため今後の活動についてよく考え直す必要がある。



塩竈プログラム

【活動背景・目的】

宮城県塩竈市は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響を受けた地域の一つである。震災から今年で約7年が経過し、建物・道路も大方復旧し、さらに新しいお店や施設もでき、塩竈市での『ハード面（目に見えるもの）』での状況はほとんど復興したといっても過言ではなくなった。しかしながら、震災の影響から受けた塩竈市の市民の心の部分である『ソフト面（目に見えないもの）』は解決されたというわけではなく、教育・経済面でもいまだ問題を抱えている。我々は、震災直後から塩竈市でボランティア活動を行っていたが、こうした状況から2017年度より、『復興支援』から塩竈の内なる部分に目を向けた『地域活性支援』に取り組むこととなった。

また、我々大学生だからこそできるボランティア活動に焦点を当て、『塩竈市の輝かしい未来』というテーマのもと、プロジェクトを多数実施してきた。今年度の活動は、特に塩竈市の将来を担う若者・子どもたちをターゲットにプロジェクトを行っている。

【活動成果】

今年度の活動は、大きく分けて5つのプロジェクトを実施した。

教育面では、学童保育・けやき教室&コラソン・サマースクールプロジェクト（詳細は下記に記載）など、小学生の子どもたちから中学生の生徒たちまでをターゲットに活動を行っている。また、経済面では浦戸諸島プロジェクトなど島民の方々など高齢者の方々に向けたプロジェクトを立ち上げた。これらのプロジェクトを通じて、我々としても塩竈市の『ソフト面』にとっても密着することができたと感じている。教育面でのプロジェクトでは、普段かわりが少ない大学生のお兄さん・お姉さんとの交流により、子どもたちに笑顔と思い出を少しでも与えることができた。不登校の子どもたちが多く通う、けやき教室での活動では、1人の子どもが『勉強して、青山学院大学に入りたい』と学校に復帰したことを職員の方から聞くことができ、子どもたちにとって今年度の活動はとても有意義なものであったと改めて感じた。

経済面では、我々学生が夏休みという一時的な時期ではあるが島のお手伝い等を行うことで、島の経済発展やコミュニティーの拡大、環境向上に貢献できた。また、学生としても地域問題に直に取り組み、島民の方と一緒にその問題解決について真剣に考えることができた。

【今後の展望】

今回の2018年度の活動で7年間という塩竈市でのボランティア活動に区切りをつけた。7年間という長い期間、塩竈市との強い絆で活動が続けてきた塩竈市には今後も『ハード面』のみならず、『ソフト面』でのさらなる復興を心より祈る限りである。また、学生としても今後ボランティア活動関係なく塩竈を訪れることにしたい。

学童保育プロジェクト

活動場所：塩竈市立第一、第二、第三、玉川、杉の入、月見ヶ丘小学校

活動期間：2018年8月20日（月）～23日（木）、2019年2月4日（月）～6日（水）

活動人数：夏期11名（学生6名、一般学生5名）・春期14名（学生スタッフ8名、一般学生6名）

【活動背景・目的】

2011年3月11日に発生した東日本大震災により宮城県では、今なお共働きの家庭が増加し、

学童保育に通う子どもたちも増加傾向にある。その一方、指導員の人数は1クラス2～3名である。一見充分そうに見えるが、学童保育では1名の指導員が見る子どもは10名が限度と言われている。多忙期（夏休み、春休み）などでは、学童保育に通う子どもたちが増え、業務作業も同時に抱える指導員には負担がかかるケースが多い。そこで、我々学生がお兄さん・お姉さんの存在として、子どもたちの遊び相手となり、指導員の負担を軽減するとともに、子どもたちに夏休み・春休みの特別な思い出を与えることができるように目標を持ち、活動に取り組んだ。

【活動内容】

大学生という普段は子どもたちにとってあまり関わりがない存在としての特徴を活かし、放課後に子どもたちの宿題のサポートや休み時間では遊び相手となった。

子どもたちも『毎年、来てくれる青学生のお兄さん・お姉さん』として認識していて、去年活動に参加した参加者のことを覚えていて、再会を子どもたちが喜ぶ場面がすべての小学校で見ることができた。活動の最後には、各学校の特徴に合ったイベント工作を実施した。イベントにとっても興味を示してくれた子どもたちが多く、笑顔で工作に取り組んでくれた。

また、我々が東京に戻ってもみんなで仲良く元気で遊んでくれるように、学生たちで作ったぬりえをプレゼントした。

【スタッフの所感】

活動時間は放課後という短い時間ではあったが、指導員さんのお仕事や子どもたちの対応の仕方を学ぶことができた。また、自分は活動をして2回目だが子どもたちが自分のことを覚えていてくれていて驚いたのと、前は落ち着いて勉強をすることが難しかった子たちが、しっかりと座って勉強をしている姿を見て、子どもたちの成長を感じることができ、継続した活動の重要性を学ぶことができた。(1年 女子)

【参加者の所感】

普段は、小学生の子どもと接する機会がなく、また学童の先生という立場での活動でもありスタートは不安があったが活動を通じて、自分なりに子どもたちとの上手なコミュニケーションをとることで自分ではない他の人のことに目を向けて考えるということの大事さに気づかれ、とても楽しい活動ができた。(1年 女子)

【今後の展望】

夏の活動が4日、春の活動が3日ということで、活動期間は子どもたちの休み期間の中では短い時間であったと思うが、去年訪れた小学校の子どもたちが自分のことを覚えていてくれたことに我々学生も驚いた。自分たちの活動は、わずかかもしれないが子どもたちに思い出を与えることができていることを改めて感じた。子どもたちには『東京から来た大学生のお兄さん・お姉さんといっぱい楽しい遊びをした。』という思い出をきっかけに、友達ともより一層楽しく学童で思い出を作っていってほしい。



サマースクールプロジェクト

活動場所：塩竈市立第一中学校

活動期間：2018年8月20日（月）～23日（木）

活動人数：5名（学生スタッフ2名、一般学生3名）

【活動背景・目的】

宮城県は全国的に見て学力が低い。理由は様々考えられるかもしれないが、宮城県塩竈市には大学がなく、生徒たちは大学生と直接関わる機会が非常に少ない。我々はそこに着目し、『サマースクール』という中学校が実施している夏休みに学校に来て勉強する期間に大学生である我々が参加し生徒と交流することで、『高校入試に向けた今後の勉強方法や様々な体験談を伝えながら、生徒たちの学習意識を向上させたい』という目的で、活動に取り組んだ。

【活動内容】

1 クラス約40名（先生1名）で、夏休みの宿題や自習を行うので、分からないところは、質問してもらい大学生がサポートしたり、問題のヒントを教えたりした。

最初は、緊張から生徒がなかなか分からない問題があっても手を挙げない場面が見られたが、すぐに収まり、最終的には何気ない会話もする仲になることができ、我々にとっても勉強を教えるついでに良いリラックスを生徒たちに与えることができたと感じた。また最終日には勉強のサポートの他に、『高校入試の体験談や東京について』という題名のプレゼンテーションを生徒に聞いてもらう時間をいただくことができた。生徒たちは、なかなか聞かない体験談にとっても興味を示していたが、特に『東京』についてのプレゼンテーションにとっても耳を傾けていた。自分たちのプレゼンテーションが生徒たちに何か良いきっかけを与え、将来について考えてくれれば幸いである。

【スタッフの所感】

勉強のサポートが目標ではあったものの、どんどん生徒たちが自分たちのことを受け入れてくれ、生徒たちとの何気ない会話から生徒たちの勉強意識や東京への興味を知ることができ、自分も様々なことを感じ考えることができた。生徒たちに、自分たちの体験談や活動が役に立ってくれればと思う。（2年 男子）

【参加者の所感】

生徒たちもとても良い子ばかりで、人情味のある学校だと感じた。

職員さんも最大限の協力をしてくださったおかげで、私にとってもとても有意義な時間を過ごすことができ、生徒たちにも大学生としての講話に興味を持ってくれて成果を出せたと感じた。（3年 男子）



【今後の展望】

Roote としての活動は終了するが、我々としては生徒たちに、『大学生の体験談や東京』についてのイメージをうまく伝えることができたので、何か良いきっかけ作りとして生徒たちの頭の片隅でも構わないので役に立つ日が来れば私たちとしても大変うれしい限りである。

浦戸諸島プロジェクト

活動場所：宮城県塩竈市浦戸諸島（野々島・桂島・寒風澤島）

活動期間：2018 年 8 月 12 日（日）～ 8 月 17 日（金）

活動人数：11 名（学生スタッフ 3 名、一般学生 8 名）

【活動背景・目的】

宮城県塩竈市浦戸諸島という地域は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災以前から若者の島離れが問題視されていた。島の主産業である漁業や農業の後継者不足や、毎年夏期に行われる花火大会などの伝統文化の担い手不足などが例に挙げられる。また、一方で島の高齢化が進み体力的に大変な作業も困難になってきている。そういった中、我々大学生が多忙期である夏期に作業と一緒にを行うことで、島の生活環境の向上と、人手不足の一時的な解消を目指した。

【活動内容】

12 日（桂島）・13 日（野々島）には年に 1 度の花火大会の準備や片づけを行い、島民の方との交流を行いながら、実際に学生もお祭りに参加することで、無事今年もお祭りを盛り上げることができた。14 日からは、浦戸諸島野々島で観光プロジェクトとして立ち上げられた『菜の花プロジェクト』に参加し、菜の花を植えるための畝作りを、隣の寒風澤島では個人農家に伺い、一人ではとても困難な草刈りや土地整備を行った。最終日には、野々島で浦戸小中学校に通う子どもたちのために、将来サッカーグラウンド場を建てたいと構想している土地の整備を行った。

【スタッフの所感】

お祭りや草刈りなどの活動を通じて、島民の方の温かさを直に触れることができた。また、震災後のお話を少しでも聞くことができ、良い経験になった。人のためになることが自分のためになることを気づかせてもらった。（2 年 女子）

【参加者の所感】

昔から、農作業を自分の手で体験したいと考えていた。炎天下の作業の中で島民の方はいつも作業をしていることの大変さを肌で感じることができ、学ぶことができて本当に良かった。（3 年 男子）

【今後の展望】

今回の活動を通じて島民の方の温かさに触れることができたが、同時に地方の人手不足や高齢化の問題についても考えるきっかけとなった。浦戸諸島の良いところを今後も PR できるように、活動に関係なくお祭りや浦戸諸島に今後も訪れていきたいと考えている。



PRプロジェクト

活動場所：宮城県塩竈市内（浦戸諸島も含む）

活動期間：2018年8月12日（日）～17日（金）

活動人数：7名（学生スタッフ2名、一般学生5名）

【活動背景・目的】

宮城県では、東日本大震災の影響もあり、2010年から2017年の7年間で観光客が約13万人減少したといわれている。さらに、塩竈市は奥州一之宮といわれる鹽竈神社や豊富な海産物で有名な魚市場など観光スポットは多数あり、仙台駅から電車で約30分という良い立地であるにもかかわらず、観光客数が仙台市の約4パーセントというデータがある。こういった状況の中、現在塩竈市では観光面に非常に強く着目し、様々な新しい施設や観光スポット・宣伝を広げている。そこで我々青学生も、『東京から来た観光客が見る視点』で塩竈市をPRし、観光客の増加、塩竈市の知名度向上として他の地域に塩竈を知ってもらおうきっかけを作ること为目标として、活動を実施した。

【活動内容】

ウェブサイトに載っている観光スポットのみならず、実際に行ってわかる『東京から来た観光客が見る視点』に着目し、塩竈市の様々なお店や観光スポットを訪れ、SNSに投稿するとともに、観光客が手に取る塩竈市の観光スポットのマップ作成を行った。また、マップ作成には日本語版・英語版に分け、海外から来る観光客に向けたマップも作成した。

【スタッフの所感】

実際に、自分たちの足で歩いてみると、気づくことがあるものの多さに実感した。また、ただPRをするといっても、どのような人を対象に塩竈のどのような所をどのようにPRしていくのか？ということ、考えることが非常に難しかったがこの活動を通じてお互いに意見交換をしながら、1つの目に見えるマップを作成できたことはとてもうれしかった。（3年 女子）

【参加者の所感】

もちろんスケジュール通りいかないこともあったがそこで解決策をお互い出しながら、最終的にはマップが完成できたことにとっても達成感を感じて、楽しかった。（1年 女子）

【今後の展望】

今回のマップを作成したことで、今後我々が塩竈を去ってもマップは『目に見える・置ける』ものなので、塩竈に少しでも興味がある若者観光客や、海外観光客の増加に期待ができる。今後このマップを手に取る人が増え、実際に塩竈を訪れることがあれば、この活動としては大成功である。

今後とも、塩竈市内の様々な場所でこのマップを置いてもらうように、市民や塩竈市役所の方々に声掛けをしていく予定である。



けやき教室 & コラソンプロジェクト

活動場所：塩竈市適応指導教室けやき教室、塩竈市学びの支援センター「コラソン」

活動期間：2019 年 2 月 4 日（月）～ 7 日（木）

活動人数：3 名（学生スタッフ 2 名、一般学生 1 名）

【活動背景・目的】

宮城県は全国的にも不登校の児童・生徒の割合が高い。その中でも塩竈市は不登校率が宮城県内でも高い指向があり、不登校支援に力を入れている。けやき教室及びコラソンはそのような不登校の生徒が通う子どもたちにとっての居場所である。しかし、限られた場所で指導員の先生などと毎日過ごしているため、閉鎖的な環境になっている現状がある。そのことから、普段関わる機会が少ないであろう年齢の近い大学生との会話、遊びやイベントを通じて交流することにより、新たな刺激を与え、興味の幅を広げ、社会や将来について考えるきっかけを与えることを目的とする活動である。また、今回はイベントとしてガラスペイントを実施した。

【活動内容】

不登校の児童が多く通うけやき教室では、子どもたちの勉強のサポートを中心に行い、間にはコミュニケーションや中遊びをして、子どもたちとの距離を縮めた。

コラソンでは、体験活動や遊びを通じて、子どもたちとのコミュニケーションを行ったり、思い出づくりを行ったりした。

【スタッフの所感】

私は昨年の春に続きけやき教室、コラソンでの活動は 2 回目であった。活動中最も嬉しかったことは、昨年活動した際に教室に通っていた生徒さんが私たちに刺激を受け、「(私たちのような) 大学生になりたい」という思いから、4 月から学校へ復帰したという報告を受けたことだ。この報告を受けた際、改めて私たちが活動する意義を感じることが出来た。

今回も 3 日間と短い間ではあったが、お絵かき、卓球やホットドッグ作りを通じて、子どもたちから話しかけてくれることも多くなり、距離を縮めることが出来た。その一方であまり話すことが得意でない生徒さんにも必要以上に話しかけてしまい、対応の難しさを感じた。子どもたちへ短い間ではあったが、大変貴重な体験が出来たと同時に、とても有意義な活動をすることが出来たと感じた。(2 年 女子)

【参加者の所感】

参加者のみんなと食事作りを積極的にできたり、生徒さんたちと交流できたのがとても有意義だった。(3年 男子)

【今後の展望】

今回で塩竈プログラムにおけるけやき教室 & コラソンプロジェクトの活動は最後であったが、帰り際に「また来てくださいね」というお言葉をいただいた。今年度で終わってしまうのは残念だが、子どもたちには我々がいなくなってしまうても、わずかな時間だが我々と過ごした時間を思い出として残していってくれたらうれしい。

また機会があれば、けやき教室及びコラソンに伺いたい。



熊本プログラム

【活動背景・目的】

2016 年 4 月に発生した熊本地震をきっかけに、震災から約 4 か月後の 8 月から震災の被害が甚大だった地域での復旧・復興支援活動を開始。翌年 2017 年 3 月からは支援先を南阿蘇村に絞り、「南阿蘇村が震災前よりも元気で魅力のある場所になる」ことを目標として主に現地での活動を実施している。

【実施成果】

今年度は南阿蘇村の状況の変化に伴い、本プログラムも復旧支援から復興支援へと移行していくことができた。その事例として、農業復旧支援では開始時から継続してビニールハウス撤去の支援をしていた土地に災害公営住宅が完成し、復旧から復興への大きな進歩が見られた。加えて、もう一つの主産業である観光業の支援を開始。観光復興支援は現地での直接的な活動だけでは終わらないため、実質的な効果が目に見えるまでが長期にわたるものの、長い目で判断するならば現地にとってより波及効果のある活動であると考えられる。

【今後の展望】

移行期にあたる今年度だったが、次年度はさらに観光復興支援を拡大、強化していく。その一つ目の取り組みとして、19 年度 4 月中旬に熊本地震発生から 3 年目に合わせて、南阿蘇 PR イベント「熊本 WEEK」を実施予定。現地の商品販売・観光マップの配布、PR 動画の発信などのコンテンツを企画、準備している。その他にも、現地や首都圏でできる継続的な観光復興支援を村の方々とともに企画し、実行していく。

観光プロジェクト

活動期間：現地調査：2018 年 8 月 6 日（月）～ 10 日（金）

ガイドマップ作成：2018 年 9 月～

活動内容：同世代に向けた、南阿蘇村の観光ガイドブック作成

活動人数：現地調査：10 名（スタッフ 5 名、一般学生 5 名）

ガイドマップ作成：スタッフ 2 名

【活動背景】

南阿蘇村の主産業の一つである観光業だが、震災発生後の阿蘇大橋の崩落や鉄道の運休など、インフラの被害や風評被害などにより今でも観光客数などに影響を受けているのが現状である。そうした中で南阿蘇村では震災を機にどうしたら観光客がやってくるのか、観光地としての在り方を改めて考えている。

そこで普段東京という流行の発信地に通い、かつ学生という世代であることの強みを南阿蘇村の観光業の復興に生かすべく、本プロジェクトを立ち上げた。

【スタッフの所感】

2017 年度までは現地での復旧支援活動に加え、熊本地震について県外、特に首都圏の関心と呼ばなければならないという考えのもとに、熊本地震についての周知活動の案が挙がっていた。しかし復旧から復興段階に進もうとしている南阿蘇村の真のニーズは、“被災地”としての南阿蘇村だ

けでなく、“魅力のつまった場所”としての南阿蘇村にも訪れてほしいというところにあった。そこには“熊本地震”という事実だけで現地に赴こうとする人はそういない、という現地の方々の諦めの気持ちも悲しいことだが含まれている。けれどもその前に考えなければならないのは南阿蘇村が、震災前は年間約 600 万人が訪れたほど魅力をたくさん持つ場所であることなのだった。

このニーズに気づいた本プログラムでは、首都圏の同世代である若者に南阿蘇村の魅力を知ってもらうために観光プロジェクト一つ目の取り組みとしてガイドブックの作成を実施。現地調査を含めて半年以上にわたり作成し、完成させた。また現地調査については、被災した東海大学阿蘇キャンパスに通うはずだった、熊本市内のキャンパスに通う東海大学「阿蘇復興への道」さんの協力をいただきながら実施した。今後も南阿蘇村の復興支援の輪を広げるべく、さらに協力体制を強めて活動を共にしていきたい。

【参加学生所感】（現地の方の反応を含む）

現地調査の中で、熊本地震を乗り越えようと様々な取り組みをされる南阿蘇村の方々の話を伺ったが、何より印象的だったのはエネルギーで新たなことに挑戦されている姿。お話を聞くたびに勉強させられた。

3 回目の南阿蘇村支援で、震災や現地のことなら情報媒体を通して知ることができるが、それだけでは得られない現地の方々やそこで活動する人の大切な想いがあることを改めて強く感じた。

【今後の展望】

今回のプロジェクトとしてガイドブックの作成・発行までは至ったものの、それはあくまで目標達成のための手段に過ぎない。目標は南阿蘇村の魅力が首都圏の若者に広まることであるため、次年度の活動ではプログラム目標を見据えながら、ガイドブックをいかに効果的にターゲットの手に渡せるかを考え、実行していく。また目標を達成する手段として、ガイドブック配布以外にも首都圏でできる活動を予定している。



農業プロジェクト

活動場所：熊本県阿蘇郡南阿蘇村、阿蘇市

活動期間：夏期：2018 年 8 月 11 日（土）～ 17 日（金）、春期：2019 年 3 月 4 日（月）～ 10 日（日）

活動人数：夏期：11 名（スタッフ 3 名 一般学生 8 名）、春期：4 名（スタッフのみ）

【活動背景】

熊本地震によってビニールハウスの倒壊や、アルバイトとして南阿蘇村の農家を支えていた東海大学生が村を離れるなど、主産業である農業は甚大な被害を受けた。その震災から二年が経った今、

南阿蘇の農業はインドネシアから農業実習生や労働者を迎えるなど、復興に向けて新たな道を歩み出している。普段交流することのない異国の方々と同じ作業を共有し、未だ人手不足を抱えている南阿蘇の農家の方々のために尽力したいと考え、今回のプロジェクトを実施した。

【スタッフの所感】

東海大生による阿蘇大橋・黒川のスタディーツアーでは、被災地のリアルな状況・現地人の体験談を伝えることが出来た。農業実習に来ているインドネシア学生と同じ現場で活動を行うことで、南阿蘇が復興に向けて具体的にどのようなことに取り組んでいるのか、異文化人との交流が農家の方々や我々学生にどのような刺激をあたえ、多角的な目線を与えるかを感じることが出来た。

【参加者学生所感】

初めてボランティア活動に参加し、被災地に訪れたが、いろいろな学びを得られた。復興の進度に合わせて支援する側もボランティアの内容を変えていかなければいけないことに気づかされた。また、現地の農家の方々が今どんなことに困っていてどうしてほしいのかという生の声が聞けたことは特に印象的だった。実際に行くと言わないのではボランティアのイメージは全く違うものだという事を感じた。

【今後の展望】

震災発生から現在にかけての現地のニーズの変化に伴い、復旧支援から復興支援に重きを置く必要が生じてきた。また、地理的な問題で現地支援は断続的にしかできない本プログラムにとって、復興支援は離れた地においてもでき、むしろその地理を活かすことのできるものであるため、双方にとってメリットのある選択だと言える。そのため従来行ってきた現地での農業支援は活動の規模を縮小させていく。



防災プログラム

【活動背景】

近年日本では多くの災害が起きている。大阪・北海道で起こったような大地震が東京に起こる確率もかなり高いと言われている。首都圏で発生した場合、液状化現象や火災などの二次災害も発生するだろう。つまり日々東京に通学している自分たち学生が被災者になってもおかしくない状況である。このような事実を知らず、防災についての知識が乏しい青学生を対象とし、彼らの防災に関する意識向上を目指し、最終的に、災害時に周囲のリーダーシップを取ることができることを目標として活動している。

2018 年 防災 WEEK

活動場所：青山学院大学 青山キャンパス

活動期間：2018 年 12 月 10 日（月）～ 2018 年 12 月 14 日（金）

活動人数：27 名（学生スタッフ 7 名、一般学生 20 名）

【活動内容】

VR 防災体験車、備蓄倉庫巡り、避難訓練、防災セミナー、ワークショップ、Roote と防災カフェ、常設展示（写真展示、避難所再現、非常食展示）の 7 つのプロジェクトを実施した。

「VR 防災体験車」は学生に大地震の様子を体験してもらうため、「Roote と防災カフェ」では防災 WEEK で行うプロジェクトの紹介を行うため実施した。「常設展示」では、実際の地震の写真を展示し、ダンボールで作った避難所を設置することで、被害規模を知ってもらうために実施した。少し変わった非常食の展示もした。「避難訓練」は 17 号館での避難の仕方を知ってもらうため実施した。自分たちスタッフのみではなく様々な方々に協力してもらって実施することができたプロジェクトも多々ある。「備蓄倉庫巡り」では青山学院安全対策課の職員の方をお呼びし、キャンパス内の備蓄品場所、種類、管理の仕方などを学んでもらうツアー形式でのプロジェクトとなった。「防災セミナー」は、渋谷区役所と青山学院防災対策課の方をお呼びし、講義を開いていただいた。「ワークショップ」では、災害救援ボランティア推進委員会の方をお呼びし、「なまずの学校」という防災知識をつけるためのカードゲームを実施した。

また、学生全体を対象とした事前アンケートと事後アンケート、参加者を対象とした参加後のアンケートの実施、WEEK 期間中いつでも書けるアクションメッセージボードの設置をし、今後の活動に生かすことにした。

【スタッフ所感】

学校にいる時に災害が起こった際、リーダーシップを取れる学生を増やすことを上位目標に、自助の知識・意欲向上を初期の目標として、この 7 つのプロジェクトを計画・実施した。しかし、防災プログラムでの防災 WEEK の開催は今回が初めてであったこともあり、各々授業がある平日にスタッフ 7 人で 7 つのプロジェクトを実施するにはかなり負担がかかり大変だった。運営の準備に精一杯で広報に注力することができず、参加者があまり集まらなかった。時には参加者ゼロで実施することができなかったプロジェクトがあったことも事実だ。もう少しプロジェクトを少なくし、1 つ 1 つに集中すること、広報の仕方を工夫し参加者獲得に努めることが課題である。ワークショップは実施した成果がはっきり見えたプロジェクトとなった。参加者も多く、皆「なまずの学校」を楽しそうに行っており、最後にとったアンケートでも楽しく学ぶことができたという意見を多く

いただいた。また VR 起震車も集客力があり、かなり多くの学生が参加していた。これら 2 つに共通することは、体験式であることと気軽に参加できるということである。このようなプロジェクトのみでは良くないが、必ず 1 つは必要なプロジェクトであり、まずそこに参加することで興味を引き出すことができれば良いと感じる。

【参加者所感】

カードを用いて防災を学ぶことができた。引き続き防災に関するイベントをしてほしい。また、他大学との連携もぜひ。

ゲームを通して楽しく学ぶことで身体を使って学ぶことができた。改めて防災の意識を高めたいと思った。

【今後の展望】

まだまだ青学生の防災意識を向上させることはできていなく、防災 WEEK の存在も広まっていないであろう。今後も年に 1 回防災 WEEK を実施し、災害時自分の身を守ることができる、さらには周囲のリーダーシップをとることのできる学生を増やすことができるよう、努めていきたい。



福祉プログラム

えびす青年教室

活動場所：恵比寿社会教育館

活動期間：前期 2018 年 6 月 24 日（日）、後期 2018 年 11 月 25 日（日）

活動人数：前期 6 名（学生スタッフ 5 名、一般学生 1 名）、後期 7 名（学生スタッフ 5 名、一般学生 2 名）

【活動内容】

東京都渋谷区教育委員会が主催している、障害者と地域のボランティアが月に一度集まる活動がえびす青年教室である。この活動は特別支援学校を卒業した障害者のコミュニティが職場と家だけになることから、交流を目的として作られた。現在は障害者もそうでない者も互いに理解し合うことで人間的成長を目指し、社会の障害者に対する理解を深めるため広報活動も行なっている。我々福祉プログラムは毎月この活動に運営やボランティアとして参加し、一般参加者を募集することで青学生の障害に対する関心を深めることを課題にしている。

【スタッフの所感】

この活動は、一回参加することで知的障害に関する価値観が変わる。これはプログラムスタッフが実際に経験していることである。障害者に対して抵抗がないと自分では思っている、実際に接して見ないことには偏見や無意識的な差別は容易に生まれてしまう。事前事後アンケートでは意識が変わったと答えた方も多く、今年の参加者は再度申し込みをする学生がほとんどであった。これは彼らの意識に変化があったと考えていいといえるだろう。また、積極的にコミュニケーションをとる参加者が多い一方、当日キャンセルや説明会不参加の応募者がいるのも現状である。手軽に参加できるボランティアならではかもしれないが、来年度からまた違った広報やアプローチの仕方を考えたい。



出張えびす

活動場所：青山学院大学 青山キャンパス一般教室

活動期間：2018 年 12 月 8 日（土）、12 月 10 日（月）、12 月 12 日（水）

活動人数：12 月 8 日の回 5 名（学生スタッフ 5 名）、12 月 10 日の回 7 名（学生スタッフ 7 名）、12 月 12 日の回 8 名（学生スタッフ 6 名、一般学生 2 名）

【活動内容】

青山キャンパスに、様々なゲストをお呼びして知的障害に関するワークショップを行った。（12 月 8 日）普段障害者と関わる仕事をしている方、ボランティアをしている学生、上記えびす青年教室運営委員など様々な角度から障害者と関わっている人々が集まり、前半は障害者に関わるように

なったきっかけやボランティアに対する姿勢などを話す場とした。後半は知的障害のある方をお呼びし、全員ですごろくを作り遊びを通じた交流を行った。

平日の回（12月10日、12日）では知的障害とは何か、どのように接すればいいか、体験を交えながら簡単な講習を行なった。障がいのある方と関わる時、自分ならどうするかを考えるワークショップを行い、普段障害者と接する機会のない学生も参加した。

【スタッフの所感】

土曜の開催で一般参加者が来ず、非常に残念であった。企画の広め方、趣旨の伝え方を考え直し、来年度リベンジできたらと考えている。

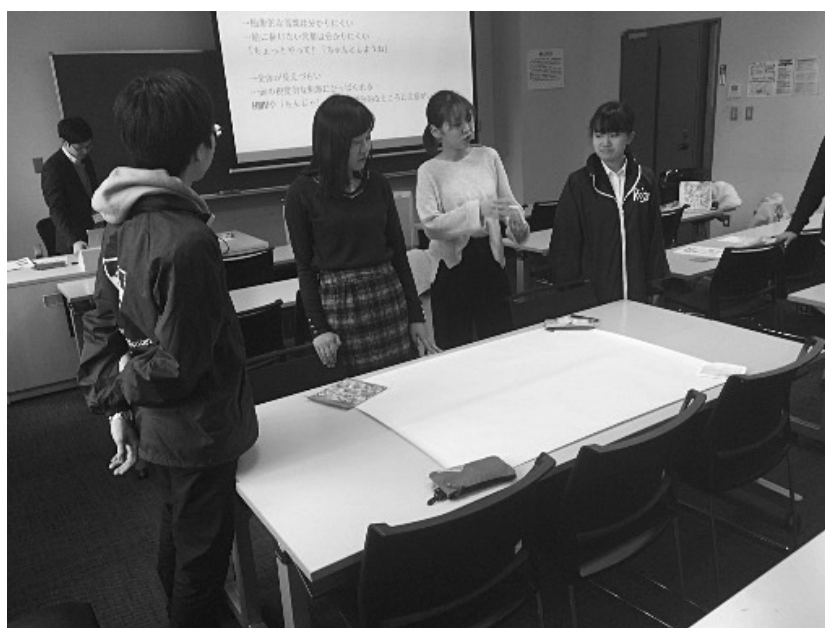
平日のワークショップは一般参加者の意見を聞ける貴重な機会だった。どうすればいいかわからない場面で自分が動けるように意識するきっかけとなった、などポジティブな感想をうかがえた。一緒に楽しみながら障害に関する関心を深めていただけたと感じ、プログラムスタッフも改めて障害というものを理解し向き合える場となった。

【今後の展望】

福祉プログラムは旧団体となるボランティアステーション時代から同じ活動を5年続けている。もちろん継続することが大切なボランティアも多いが、人の入れ替わりの激しい学生団体という面において、ただ参加するだけとも違うアプローチの仕方があるのではないかと考えた結果が出張えびすである。また、えびす青年教室の一般参加者募集もあえてイベント時ではない通常のえびす青年教室を見てもらえる月に募集をした。

活動を少しずつ変えて感じたのは、学生の福祉に関する興味が圧倒的に薄いことである。福祉業界全体の課題ともいえることであるが、いかに学生目線で経験を通して感じられるか、それをアウトプットできるかが福祉プログラムの活動の認知につながるのではないだろうか。

今年は新たに意識調査も行なった。それを生かして、来年からは渋谷に対して学生が感じている問題をもう少し扱っていかねばならないと考える。



食品プログラム

食品ロス講演「食品ロス SOS」

活動場所：青山キャンパス 17 号館

活動期間：2018 年 7 月 4 日（水）

活動人数：14 名（学生スタッフ 4 名、一般学生 10 名）

【活動内容】

青学生に食品ロスについての理解を深め、食品ロスという問題に取り組むために何ができるかを考えてもらいたいと思い、NPO 法人シェア・マインド代表松本靖子さんをお招きし、食品ロスに関する講演会を開催し、講演後にはワークショップを行った。松本さんには食品ロスの現状や日本の貧困、「無料のスーパー」の意義と今後について講演をしていただいた。そしてワークショップでは、松本さんを交え参加者をグループ分けし「食品ロスを改善するためどのような具体案が考えられるか」について話し合い、意見の交換をもらった。

【スタッフ所感】

事後アンケートの結果、参加者の多くは既に食品ロスについて知っている人が多かったが、今回の活動を通して新たな知識・視点を手に入れたという回答がほとんどであった。松本さんにお越しいただき、現場の声を生で聞くことができたことがとても有意義であり、効果的であったと感じた。後半のワークショップでは、講演会を聞いた上で考えたことや思い付いたアイデアを共有することにより、参加者の知識がより深まったことが考えられる。しかし、今回の活動で提供できたのはあくまでも食品ロスについての理解を深める場、話し合いの場であり、実際に食品ロスを改善するための活動には取り組んでいないという点は留意しておかなければならない。この活動が与えたのは食品ロス問題に携わるきっかけに過ぎないため、今後も継続的に情報共有や実際に活動する機会を提供することが必要であると考え。



小盛カード

活動場所：青山キャンパス 17 号館 1 階・イチナナ食堂

活動期間：2018 年 10 月 15 日（月）～ 10 月 26 日（金）

【活動内容】

青山キャンパス 17 号館 1 階・イチナナ食堂にご協力いただき、学食の食券機に「小盛カード」を設置した。「小盛カード」とは、学食で提供されている定食の白米の量を無料で半分に減らすことができる食券だ。イチナナ食堂で提供されている定食の通常の白米の量は 200g であり、一般的な定食の白米の量よりも少し多めである。そのため食べきれず残され、食品ロスが発生する場合があった。「小盛カード」を設置することによって、学食で発生する白米の食品ロスを未然に防ぐことを目指した。また、毎日たくさんの青学生が利用する学食に「小盛カード」を設置することにより、青学生が気軽に食品ロスを防ぐことに貢献できるとともに、認知及び理解がより広がることを期待した。

【スタッフ所感】

小盛カードの設置により、ご飯が多いと感じている学生が「残す」のではなく「予め減らす」という手段を取りやすくすることができ、食品ロスを気軽にかつ未然に防ぐことができるようになったと思われる。実際、小盛カードは半月で 203 枚利用されていた。小盛カードはイチナナ食堂の食品ロス削減に貢献できていたと言えるだろう。そして小盛カードは現在も設置されている。しかし広報活動の終了により、小盛カードと食品ロスのつながりが一見わからなくなってしまう可能性もある。そのため今後は小盛カードの利用者を増やすとともに食品ロスを知ってもらったり考えたりしてもらえそうな働きかけが必要である。



食育活動 in 初台キッズ食堂

活動場所：渋谷区初台青年館

活動期間：2018 年 11 月 22 日（木）

活動人数：6 名（学生スタッフ 4 名、一般学生 2 名）

【活動内容】

初台キッズ食堂にて調理の手伝いと食事をしに来た子どもたちへ食品ロスについての食育活動を行った。初台キッズ食堂は定期的にボランティアの方々が子どもたちのために健康的な食事を提供している団体である。私たちは食育活動のために事前に数日間参加者の方々と打ち合わせを行い、子どもたちが食品ロスに興味関心を持ち、理解してもらうためにはどうすれば良いかを考えた。食品ロスに関するクイズやカルタを製作することで子どもたちが楽しみながら学べるような工夫をした。当日は 10 名程度の子どもたちや親御さん、キッズ食堂のボランティアの皆さんの前で食育活動を行い、食品ロスの現状や自分たちにできる対策についての知識を広めることができた。

【スタッフ所感】

食育活動は初めての試みで活動場所や食育の内容について悩むことも多かったが、初台キッズ食堂の方や参加者の皆さんに協力していただき活動を実現させることができた。食品ロスカルタは参加者のアイデアであり、当日はとても盛り上がった。クイズやカルタを作成するにあたり、食品ロスについて新たに得た知識もあり、自分たちの理解もより深まった。キッズ食堂で食育活動することによって、子どもたちが食品ロスについて考える機会を提供できただけでなく、参加者も「子ども食堂」という子どもたちに食事提供をしている団体があることや、それに波及して食糧問題や食生活の変化などの様々な問題に目をむけるきっかけになったのではないかと考える。

【今後の展望】

食品ロスプログラムは 2018 年度で 2 年目であり、青学生に食品ロスという言葉を普及させることを主とした活動を行ってきた。その甲斐もあり、2018 年度に行った「食品ロスという言葉を知っていますか」というアンケートでは 52%（前年度比+ 11%）となり、認知度が高まっていることが確認できた。そのため 2019 年度からは食品ロスという言葉を広めるだけでなく、青学生が実際に食品ロスを減らすことに貢献できるような企画を考えていきたいと考えている。



ネパールプログラム

活動場所：ネパール共和国・カトマンズ

活動期間：2019 年 2 月 3 日（日）～ 13 日（水）

活動人数：7 名（学生スタッフ 2 名、一般学生 4 名）

清掃活動（Clean Up Campaign）

活動対象：カトマンズ市内の中学校

活動期間：2 日間・3 校

【活動背景・活動内容】

清掃活動では、カトマンズ市役所環境課担当者の協力の下、市内の中学校を訪問しプロジェクトを実施する。プロジェクト内容のメインはゴミ拾いで、グループに分かれて学校周辺や校内のゴミを拾う。1 グループにつき 2、3 名の青学生がついて先導し、分別をしながら進めていく。それが終わったら教室に戻り、青学生も交えてゴミ問題がテーマのグループワークを実施する。

カトマンズ市内では、道路や学校の校庭などにゴミが落ちているのがあたりまえの状況である。現在カトマンズ市役所では、ゴミ問題の改善に力を入れている。カトマンズ市内ではゴミ処理施設はおろか、ゴミ収集のシステムもまだ確立されておらず、家庭内で出たゴミは有料のゴミ収集業者に回収してもらうか、そのお金さえ用意できない住民は家の前の道路に捨てている。彼らは自らの国の状況を「50 年前の日本と同じ段階」と言い表しており、改善のために様々な策を講じている段階である。そこで私たちは、担当者の方のサポートのもと中学生にゴミ問題に関心を持ってもらい、かつ近隣住民にも有効な啓発活動になり得るゴミ拾いを実施した。それぞれの学校でもゴミ問題に力を入れて取り組んでいる学校が多く、私たち青学生の日本人としての意見を聞き、積極的に活動に参加してくれた。英語でコミュニケーションをとることはお互い母語同士ではないため初めは苦戦したものの徐々に積極的に話すことができるようになった。国籍や言語を超えて一致団結し、1 つの問題について考えることができた。また指標であるアンケートの結果は、すべての項目で数値が上がり効果が期待できるものとなった。彼らは真摯にこの問題に取り組んでおり、私たちにとっても大変勉強になる機会だった。ネパールについて考えることを通して、自分たちの日本での生活を見つめ直すきっかけとなった。

カトマンズ市ではゴミの収集や処理において新たな制度を導入しようとしている。それにあたって市は、学校へ子どもたちにゴミの分別を習慣づけられるように教育することを求めている。私たち日本人の学生がネパールの子どもたちと一緒にこの問題について考えることは、彼らにとってより影響力のある記憶に残る経験となり得るだろう。今後もカトマンズ市役所と協力し、ニーズに合った活動をしていきたい。

衛生教育（Sanitary Education）

活動対象：カトマンズ市内の小学校

活動期間：1 日 1 校・3 日間

【活動内容・活動背景】

衛生教育ではネパールの NGO 団体 Food For Life Nepal と協力し、カトマンズ市内の公立小学校を訪問し給食配膳と手洗いの指導をする。貧しい子どもたちが多い公立の小学校を訪問し給食配膳を行い、その学校で手洗いの重要性を説いた紙芝居やクイズを実施したり、日本ユニセフ協会の推奨する手洗いダンスという正しい手洗いの方法を示したものをネパールの民謡に合わせて子どもたちと踊ったりする。

ネパールの子どもたちはご飯を手づかみで食べることもあり、手洗いはとても彼らにとって重要である。正しい手洗いを習慣づけることは感染症の予防になり衛生状態の向上に繋がる。ネパールの子どもたちの多くは歌ったり踊ったりすることが非常に好きだそうで、子どもたちは楽しんでくれた。また紙芝居やクイズも学校の先生方の協力のおかげで、内容をしっかり理解しているようだった。最後に学校の水道で覚えた手順で手を洗う際には、一つひとつの手順に時間をかけて丁寧に洗うことができていた。この活動もまた、私たち外国人に教わることによって子どもたちへの影響力は大きくなり、より楽しんで積極的に活動に参加してくれた。

Food For Life Nepal とはネパール国内で活動する NGO 団体である。この団体は、寄付を募り貧しい子どもたちの多い公立小学校に無償で給食を配膳している。その活動は年々拡大しており現在では給食のみならず文房具や制服などを寄付している。“No child shall be deprived of education due to hunger” を理念に掲げ、貧しい子どもたちにも平等に教育を与えること、空腹を満たすことで教育レベルを向上させることを目的に活動している。その Food For Life Nepal は独自のキッチンを持っており、そこで給食を作り車やバイクで配達する。私たちはそのキッチンでの給食作りを手伝い、オフィスを訪ねて団体についての話を聞いた。その後実際に小学校に給食を運び、私たちの手で子どもたちに給食を配膳した。子どもたちは給食が到着するのを心待ちにしていたようで、給食を配膳しているときにその喜びが伝わってきた。彼らの給食配膳のおかげで、貧しくて家で昼ご飯が食べられなかった子どもたちが学校に来るようになり出席率が上昇しただけでなく、空腹による集中力低下を解決したことによって学校全体の学力レベルが向上した。食は教育と密接に関係していることを実感したと同時に、食の大切さを再確認した。

【スタッフ所感】

年々訪れる度にネパールが進んでいることを実感し、そして改めて素敵な魅力ある国だと感じた。私たちは先進国である日本の大学生として、ネパールで何ができるのか、何が求められているのかしっかり考えて今後の活動に反映させていきたい。

【参加者所感】

ネパールプログラムでは、ネパールという発展途上国での経験を通して幸せとはなんなのかと考えさせられた。経済の発展の度合や貧富の差とは関係なく、心の豊かさが大事なのだと知った。人の温かさや伝統的な文化に触れることができて貴重な経験になった。



インドネシアプログラム

活動場所：インドネシア、南タンゲラン

活動期間：2018 年 8 月 19 日（日）～9 月 1 日（土）

参加人数：6 名（学生スタッフ 2 名，一般学生 4 名）

【活動内容】

インドネシア国内ではポイ捨てを始め、ごみ収集システムや分別問題などのゴミ問題が深刻であり、人々の生活環境に悪影響を及ぼしている。しかし根本には、問題意識の低さという問題がある。そこでこのプログラムは、南タンゲランの高校を訪問し、国内のゴミ問題に対して国民としてどうアプローチするべきなのかをディベートしてもらう授業を行った。

まず模擬国家を作成し、ゴミ問題について模擬政府の立場から改善案を出す。この際いくつかの前提条件（周辺環境や経済状況、可能設備や民度 etc）を付加することで可能な選択肢を限定し、最終的にディスカッションに値するような結論を各グループで出す。その後クラス単位で発表・ディベートを行い、意見に質問や攻撃をぶつけることで、よりハイクオリティな対策案を出す。上の過程を踏んだのち、現地で清掃活動を行なっている NGO 団体、Jakarta Osoji Club（以下 JOC）がどのような活動を行なっているかの紹介をし、授業後にも発展するように参加を促した。

【スタッフ所感】

まず自国のシステムや現状を知ることで問題意識が生まれた。生徒の反応は、“このままではいけないと思う” というものだった。そこで身の回りから良くしていこうという意欲が生まれた。また今回はそこで終わるのではなく、“ではどのようにして行けばいいのか？政府にはどのような対策やシステムを構築して欲しいのか？” というところまで議論したため、実際に問題に取り組むことで生徒たちはこの問題が解決しなければいけない難しいものなのだと、より実感することができた。毎授業後に行った JOC の活動説明にも関心を持ち、将来につなげたいからと参加する生徒もいた。この授業で行ったディスカッションの中で出てきたアイデアを現実になりたいと言っており、授業には意味があったと感じた。

【参加者所感】

インドネシアの現状を教えるにあたり、参加者の理解度を図った結果、活動前後で正答率が約 75% アップ。また、言語が通じないことがある中でコミュニケーションを取らなくてはならないため、英語力の向上はもちろんだが、それぞれが試行錯誤し、各々アプローチで生徒との交流を図った。必然的に積極性は上がり、身振り手振りやアイコンタクトの取り方は日に日に成長した。さらに、授業を行なっていく中で気付いたことを反省 MTG で共有するなど、観察力の向上も測ることが出来た。

【今後の展望】

学年は上がり、新しい生徒は毎年入学するため継続するニーズはある。学校側も来年もぜひのこと。まだ 1 年に 1 回の一時的な活動という印象がある。次回からは 1 年を通じて、またはインドネシアの学校内で後輩に活動内容が継承されるシステムなどを提案・実施出来れば良いと考えている。



フィリピンプログラム

【活動背景・活動目的】

今年度は例年と異なって、フィリピン現地の活動は実施していない。この1年間は来年度からの活動予定先となるカノッサ国際ボランティアと共に新しいフィリピン現地スタディーツアーを企画した。来年度からはフィリピンの首都―マニラの郊外にある小さな町で NPO の支援を受けている子供をターゲットに運動、日本文化などを教える活動を計画している。これ以外にスタディーツアーとしてフィリピンを深く知り、参加者とともに貧困の在り方や支援のすすめ方を考える。来年度の現地活動が円満に実行できるために1年間かけて計画をした。

国内の活動では、シキホール島の農村地域に住む子供たちの生活費のために、モリンガを使った商品を開発、販売したり、古本を回収して寄付金を募った。

モリンガを使用した商品開発

活動場所：青山学院大学 青山キャンパス構内

活動期間：2018 年 9 月

【活動内容】

9 月上旬に、青山キャンパスのイチナナ食堂とコラボして、フィリピン、シキホール島の特産品の一つであるモリンガを使用した定食料理を販売した。値段は 500 円であり、人気のメニューとなった。モリンガは日本に住む我々にとってはなじみのない食べ物であるが、近年 JICA や国連食糧計画で注目される食べ物の一つである。なぜならばモリンガには、人間に必要なほぼ全ての栄養素、ビタミン、カルシウム、アミノ酸等が豊富に、そしてバランスよく含まれており、奇跡の木（miracle tree）で環境も守る一次世代のスーパーフードだと言われている。学食以外に、ナナカフェでモリンガアイスクリームとモリンガクッキーを販売した。この売り上げの一部を、シキホール島のモリンガ基金を支援し、現地の子供たちの生活支援を行った。

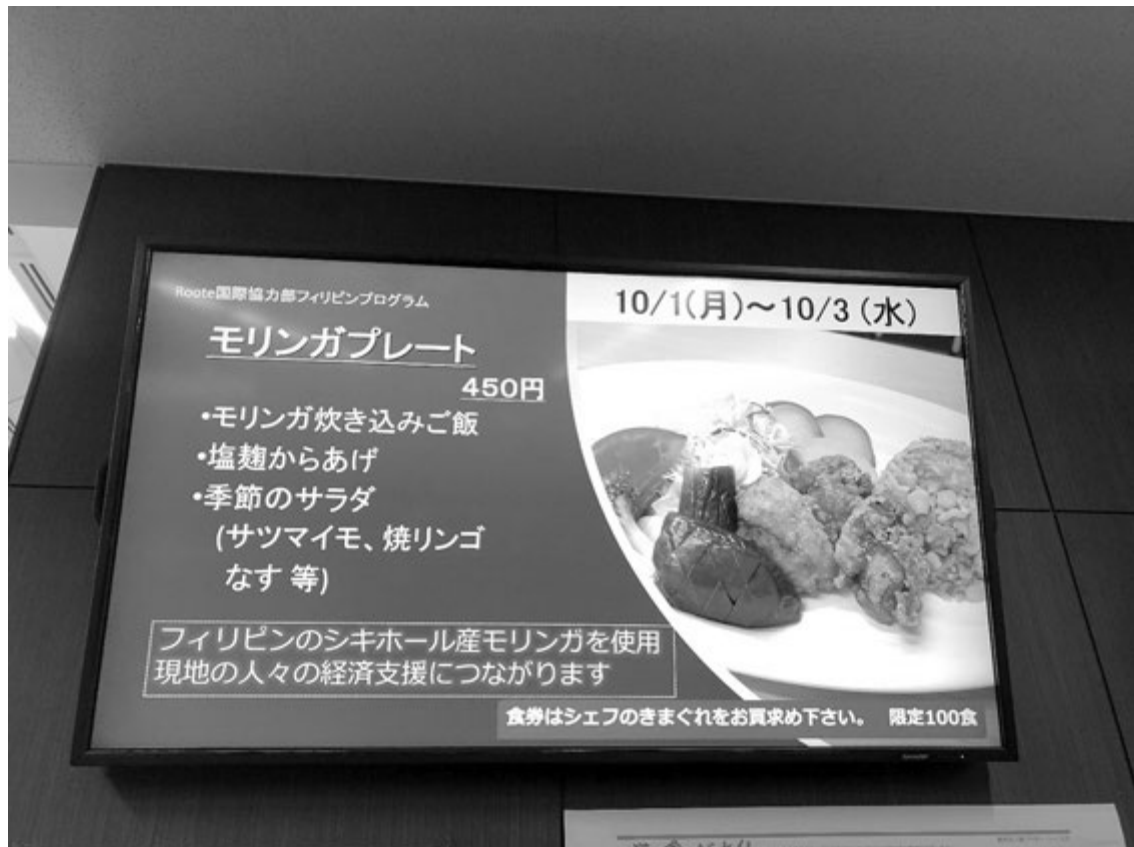
【スタッフの所感】

モリンガの商品開発を通して、私達はシキホール島に住む子供たちの生活のために売り上げを集めることができた。同時に青学生にモリンガのおいしさ、すばらしさを伝えられたのだろう。外部効果としてフィリピンに対して関心、興味を持つ人が増えたと思う。来年も青学生にもっとフィリ

ピンのことを知ってもらえる活動ができることを望む。

【今後の展望】

2019 年 8 月にスタディーツアーが実施できるようにカウンターパートと調整する。そして Roote メンバー以外の一般学生の募集を行う。スタディーツアー後には国内で参加者のメンバーと共に現地をターゲットとした事後活動も計画している。



5. 資料

5.1 ボランティアセンター利用状況

2018 年度ボランティア参加者について（ボランティアセンター集計）

参加者とリピーター数		参加カテゴリー	
(単位：人)		(単位：人)	
延べ人数	279	ボランティア活動	186
参加人数	216	ボラサポ	78
リピーター	58	セミナー・講座・シンポジウム	9
		教職員参加	6
		総計	279

参加者の属性（所属学部等）と活動分野

		(単位：人)						
活動分野 属性		教育	国際協力	災害・ 復興支援	清掃	福祉	地域	その他
学部生		28	48	118	1	18	31	15
文		6	8	45		6	3	2
フランス文学		2	1	6				
英米文学		4	5	18		3	1	
史学			1	2			2	1
日本文学			1	11				1
比較芸術				8		3		
教育人間科学		18	6	14		6	1	
教育		17	6	13		2		
心理		1		1		4	1	
経済			2	5			3	
経済			2	4			2	
現代経済デザイン				1			1	
法			1	12	1	1	1	2
法			1	12	1	1	1	2
経営				5				1
マーケティング				2				
経営				3				1
国際政治経済		2	8	8		2	4	9
国際経済			4	1		2		3
国際政治		2	2	3			3	1
国際コミュニケーション			2	4			1	5

総合文化政策	1		10		3	3		17
総合文化政策	1		10		3	3		17
理工	1		9					10
化学・生命科			1					1
機械創造工			3					3
経営システム工			3					3
物理・数理	1		2					3
社会情報			6					6
社会情報			6					6
地球社会共生		23	4			16	1	44
地球社会共生		23	4			16	1	44
大学院生	1	1	3		1	1		7
会計プロフェッション研究科	1							1
会計プロフェッション専攻	1							1
国際マネジメント研究科		1	2			1		4
国際マネジメント専攻		1	2			1		4
国際政治経済学研究科			1					1
国際コミュニケーション専攻			1					1
理工学研究科					1			1
理工学専攻					1			1
留学生 交換留学生			1					1
教員	2	2	2					6
教育人間科学部	2							2
地球社会共生学部		2						2
高等部			1					1
非常勤講師			1					1
職員		1	5					6
学務部			1					1
学生生活部		1	1					2
短大事務部			3					3
総計	31	52	129	1	19	32	15	279

青山キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2018 年度 登録	52 団体
------------	-------

2. ボランティア等募集件数

ボランティア募集等総数

月別ボランティア等募集

(単位：件)

月	件数
4	37
5	75
6	57
7	39
8	6
9	79
10	62
11	42
12	19
1	78
2	40
3	48
合計	582

カテゴリー別ボランティア等募集件数

(単位：件)

カテゴリー	件数
ニュースレター	188
ボランティア募集	138
イベント	103
その他	87
講座・セミナー	56
助成金情報	10
合計	582

3. 月別来場者数

	青学生		教職員		他大学生		一般		合計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
4月	14	30	2	4	0	0	1	2	53
5月	8	17	0	0	0	0	1	0	26
6月	5	17	0	0	0	0	0	0	22
7月	4	11	0	0	0	3	1	1	20
8月	2	0	0	0	0	0	3	1	6
9月	0	17	0	0	0	0	1	5	23
10月	4	11	0	1	0	0	0	0	16
11月	0	19	0	0	1	0	1	1	22
12月	6	31	0	1	3	2	9	2	54
1月	1	10	1	2	2	1	8	1	26
2月	0	3	1	0	0	0	5	1	10
3月	1	14	1	1	1	2	6	1	27
合計	45	180	5	9	7	8	36	15	305

4. 相談内容区分

	1 国内ボ ランティアに ついて	2 海外ボラ ンティアに ついて	3 ボランティ ア保険に ついて	4 組織運営・ 活動につい て	5 緊急支援	6 募金・寄付	7 フェアト レード	8 ソーシャル ビジネス・ BOP・CSR 等	9 その他	合計
4月	3		1				1		1	6
5月	2								2	4
6月	2	1	1							4
7月	1								2	3
8月	1									1
9月	3									3
10月	1			2					1	4
11月									4	4
12月	3	1							2	6
1月	2								1	3
2月	1								1	2
3月	1									1
合計	20	2	2	2	0	0	1	0	14	41

5. 主な相談内容

月	相談内容
4 月	・ ボランティア全般に興味がある。特にオリンピックのボランティア。
	・ ボランティア保険の加入について。
	・ 8月にボランティアをしてみたいが、何か情報が欲しい。
	・ ボラセンオリエンテーションに参加できないが、他にボランティア参加できる方法はあるか？
	・ フェアトレード、ボランティア情報、NGO/NPO 活動について。その他オリンピック関連のボランティアの募集があれば連絡が欲しい。
5 月	・ 『ヒーロー』という NGO のカンボジアツアーに参加したところ、団体のスタッフで青学の教室を使って青学生向けに団体の活動紹介を行いたい VC で協力可能か？
	・ 夏休みに参加できるボランティアを探している。
	・ 英語異文化交流キャンプ応募。
	・ Green Bird 青学支部 6 月中 ゴミ収集について
6 月	・ 夏・春休みに参加できるプログラムについて知りたい。
	・ 総社市のボランティアについて詳細が知りたい。
	・ 個人で外部のボランティア（小学校）に参加するにあたり、先方より青学において保険に入っているか確認が必要とのことで、生活課から VC を案内された。
	・ 夏ボラ・陸前高田について詳しく知りたい。
7 月	・ 授業で、日本の女性の労働条件について調べる課題が出たので、詳しく知っている人 or 団体があるようなら紹介してほしい。
	・ 古着回収について知りたい。
	・ 豪雨災害ボランティアについて詳しく知りたい。
8 月	・ 9、10、11 月にできる国内ボランティアについて知りたい。
9 月	・ 子どもテーブルについて。HP を見て来室。いくつかの活動があり、それぞれの違いなど知りたい。参加者は他にいいのか知りたい。
	・ 以前から何かやりたいと思っていたが、何から始めてたらよいかわからないので、教えてほしい。
	・ 子どもテーブルのボランティアに興味があり、申込方法を教えてほしい。
10 月	・ ポータル掲示の小盛カードで食品ロスを減らすことについて。そもそも食品ロスは学生の食べ残しなのか、食堂側の廃棄の多さなのか（発注過多など）、その統計はどうなっているのか知りたい。活動の意味はあるのか。
	・ オリンピック都市ボランティアに参加したいがどうしたらよいか。
	・ クリステル・ヴィ・アンサンプル Panel for life の活動をスタートとしてボラサポの応募とその他の活動を始めていきたいが、どのようにすればよいか教えてもらいたい。
	・ 学習支援ではなく、スクールカウンセラーのような相談にのるボランティアを探しており、情報が欲しい。
11 月	・ 東京オリンピック・大会ボランティア参加希望。
12 月	・ 東京オリンピック・大会ボランティア参加希望。
	・ 文化交流に関わるボランティアを東京・神奈川でさがしており相談したい。
	・ 国内の教育支援と海外ボランティア情報を知りたい。
	・ 大学の連携コードを知りたい。
	・ 春休みに参加できる活動について知りたい。
1 月	・ 東京オリンピックボランティアにエントリーしたが、締切当日だったため登録完了の通知が来ないため、どうしたらよいか相談したい。
	・ 外国人（スイス）に紹介できるボランティア情報について知りたい。
	・ 春休み、できれば 3 月中旬ごろにボランティアしてみたい。3-4 日程度の宿泊型でも可能。
2 月	・ ボランティア応募の詳細について：渋谷区こどもテーブルの活動先の一つ「渋谷のラジオ教室 子どもテーブル」と「渋谷のラジオ」とはどんな関係があるのか？
	・ 国内でボランティアをしたいので、紹介してほしい。
3 月	・ 渋谷区こどもテーブルについて。

相模原キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2018 年度 登録	14 団体
------------	-------

2. ボランティア等募集件数

ボランティア募集等総数

月別ボランティア等募集件数

(単位：件)

月	件数
4	8
5	12
6	2
7	8
8	0
9	0
10	8
11	3
12	2
1	3
2	2
3	1
合計	49

カテゴリー別ボランティア等募集件数

(単位：件)

カテゴリー	件数
ボランティア募集	34
ニュースレター	0
講座・セミナー	4
イベント	5
助成金情報	1
その他	5
合計	49

3. 月別来場者数

	青学生		教職員		他大学生		一般		合計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
4月	30	29	1	0	0	0	4	1	65
5月	17	8	1	0	0	0	1	1	28
6月	19	14	0	0	0	0	0	0	33
7月	10	6	0	0	0	0	2	1	19
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	7	5	0	0	0	0	0	0	12
10月	22	13	0	0	0	0	0	0	35
11月	4	4	0	0	0	2	1	0	11
12月	6	3	0	0	1	0	0	0	10
1月	7	6	0	0	0	0	0	0	13
2月	0	1	0	0	0	0	0	0	1
3月	1	1	0	0	0	0	0	0	2
合計	123	90	2	0	1	2	8	3	229

4. 相談内容区分

	1 国内ボ ランティアに ついて	2 海外ボラ ンティアに ついて	3 ボランティ ア保険に ついて	4 組織運営・ 活動につい て	5 緊急支援	6 募金・寄付	7 フェアト レード	8 ソーシャル ビジネス・ BOP・CSR 等	9 その他	合計
4月	2	0	0	1	0	0	0	0	2	5
5月	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4
6月	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
7月	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
11月	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
12月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	9	0	0	2	0	0	0	0	6	17

5. 主な相談内容

月	相談内容
4月	・ こどもテーブルへの申込をしたい
	・ ボランティアセンターオリエンテーションに団体として参加したい
	・ ボランティアセンターオリエンテーションに出席出来なかったため、当日の内容を知りたい
	・ 町田市立町田第二中学校での学習ボランティアを希望
	・ Roote の活動について知りたい
5月	・ 障がい学生支援希望
	・ SIVA（公認団体）の福祉系での活動先を探し中、情報が欲しい
	・ ボランティア情報がほしい。（東京・神奈川で短期・長期は問わない）
	・ 企業が主催している、ビジネスについて学べるようなボランティア情報が欲しい
	・ 夏季休暇中に参加できるボランティア情報を希望
6月	・ 横浜教育ボランティアについて知りたい
	・ 海外ボランティア合同説明会に当日出席できないが、情報が欲しい。
7月	・ 授業の一環で夏休みに学生数名で東北震災地域でボランティアを予定。受け入れ先を探し中
	・ 福島市スタディツアー参加について教えてほしい
10月	・ Roote の防災活動についての情報収集
11月	・ 学内のバリアフリー（マップ）について知りたい
	・ 大会ボランティア申込みの報告

5.2 ボランティアセンター規則

(2016 年 11 月 24 日理事会承認)

改正 2018 年 1 月 25 日

改正 2018 年 6 月 18 日

(趣旨)

第 1 条 この規則は、青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項の規定に基づき、青山学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。

[青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項]

(センターの目的)

第 2 条 センターは、本学におけるサービス・ラーニングとしてのボランティア活動の支援を通じて、学生、職員が社会貢献活動を体験することにより自らの学びがより豊かなものとなるよう、それらの者の自発的な社会活動への参加を促すとともに、社会の様々なコミュニティが抱える課題の解決に取り組み、社会貢献活動に積極的に関わることができるサーバント・リーダーを社会へ輩出することを目的とする。

(センターの事業)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) センターの目的を達成するための調査及び企画立案
- (2) ボランティア活動企画に関する情報収集及び管理
- (3) ボランティア活動への参画機会の提供
- (4) ボランティア活動の実施促進
- (5) ボランティア活動に参画する学生、団体の能力強化
- (6) ボランティア活動に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
- (7) ボランティア活動の社会的及び教育的効果の評価と勧告
- (8) ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信
- (9) ボランティア活動及び市民社会の活性化のための調査研究
- (10) 前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

(本部及び分室)

第 4 条 センターは、青山キャンパスに本部を置く。

2 センターは、前条に規定する事業のうち相模原キャンパスに係るものを行うため、同キャンパスに分室を置く。

(センターの組織)

第 5 条 センターにセンター長 1 名を置く。

2 センターに副センター長 1 名を置く。

3 センターにボランティアコーディネーター若干名を置く。

4 センターに助手若干名を置く。

5 センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6 センターの運営等に必要事項を検討するため、運営委員会の下にボランティアセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

(センター長)

第6条 センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2 センター長は、学長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3 センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長は、再任されることができる。

(副センター長)

第7条 副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2 前項に規定するもののほか、センター長が、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3 副センター長は、センター長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4 副センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 副センター長は、再任されることができる。

(ボランティアコーディネーター)

第8条 ボランティアコーディネーターは、ボランティア活動に係る専門知識を有する学校法人青山学院（以下「本法人」という。）の専任の職員又は当該職員以外の者（以下「外部の専門家」という。）をもって充てる。

2 ボランティアコーディネーターの職務は、次のとおりとする。

- (1) ボランティア活動に係る情報収集及びその発信に係る支援
- (2) ボランティア活動の機会提供に係る支援
- (3) ボランティア活動の実施に当たっての外部組織の紹介及び当該外部機関との調整
- (4) ボランティア活動に係る学習機会の提供に係る支援
- (5) ボランティア活動における相談に対する対応
- (6) 学生スタッフへの指導及び助言
- (7) ボランティア活動に係るプログラム開発及びその支援
- (8) ボランティア活動における本学と外部機関との連携に係る支援
- (9) ボランティア活動に係る本学と外部機関とのネットワーク構築及びその支援
- (10) ボランティア活動に係る記録及び統計資料の作成及びその支援
- (11) 前各号に規定するもののほか、センター長がセンターの目的を達成するために必要があると認めた業務

3 ボランティアコーディネーターは、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。

4 ボランティアコーディネーターの任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 前項の規定にかかわらず、センター長が特に必要と認める場合は、1年未満の任期を定めることができる。

6 第4項の規定にかかわらず、センターの助手がボランティアコーディネーターとなる場合の任期は、当該助手としての在職期間とする。

7 ボランティアコーディネーターは、再任されることができる。

8 第 1 項の規定により、外部の専門家をボランティアコーディネーターとして委嘱した場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規の定めにより、報酬・謝礼を支給することができる。

[学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規]

(センター助手)

第 9 条 センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用され、センターに所属する本学の専任教員とする。

[学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）]

(センター助手の職務)

第 10 条 助手に関する就業規則第 4 条第 3 項の規定によるセンター助手の職務は、同条第 1 項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

[助手に関する就業規則第 4 条第 3 項]

(1) 第 3 条に規定するセンター事業に係る業務

[第 3 条]

(2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

(センター助手の資格)

第 11 条 センター助手は、助手規則第 5 条第 1 項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第 2 条第 5 項各号のいずれかに該当するものでなければならない。

[助手に関する就業規則第 5 条第 1 項] [青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第 2 条第 5 項各号]

2 前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第 5 条第 2 項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア活動に係る専門的知識を有する者とする。

[助手規則第 5 条第 2 項]

(センター助手の雇用手続)

第 12 条 センター助手の雇用は、次項から第 4 項までの規定による。

2 センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めたときは運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状及び当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。

3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。

4 候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び理事会の承認を得なければならない。

(センター助手の雇用契約の契約期間等)

第 13 条 センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

(運営委員会の構成)

第 14 条 運営委員会は、次の委員をもって構成する。

(1) センター長

- (2) 副センター長
- (3) 大学宗教部長
- (4) ボランティアコーディネーター
- (5) 本学の職員の中からセンター長が指名する者 若干名
- (6) 事務局長
- (7) 学生生活部長
- (8) 政策・企画部長
- (9) 学務部長
- (10) 相模原事務部長

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項各号に規定する委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3 前項及び第1項第5号に規定する委員の任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

5 運営委員会に委員長1名を置き、第1項第1号に規定する委員をもってこれに充てる。

(運営委員会の招集、開催、表決数等)

第15条 運営委員会は、委員長が招集し、議長となる。

2 運営委員会は、年2回以上定期的に開催する。ただし、委員長が必要と認めたときは、随時開催することができる。

3 運営委員会の開催は、委員の3分の2以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4 運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5 委員長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(運営委員会の審議事項)

第16条 運営委員会は、次の事項を審議する。

- (1) センターの運営等に係る基本方針に関すること。
- (2) センターの予算及び決算に関すること。
- (3) センター長、副センター長及びセンター助手の人事に関すること。
- (4) ボランティアコーディネーターの委嘱、任期等に関すること。
- (5) 前各号に規定するもののほか、実務委員会から付議されたこと。

(実務委員会の構成及び開催)

第17条 実務委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) ボランティアコーディネーター
- (4) 学生生活部から 若干名
- (5) 学務部教務課から 若干名
- (6) 学務部国際交流課から 若干名
- (7) 相模原事務部から 若干名
- (8) 本学の職員の中からセンター長が指名する者 若干名
- (9) 学生スタッフの代表

- 2 センター長は、必要があると認める場合は、前項各号の委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。
- 3 第1項第4号から第9号までに規定する委員の任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 前項の委員は、再任されることができる。
- 5 実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。
- 6 センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

（実務委員会の業務）

第18条 実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。

- (1) センターの事業計画等に関する事。
- (2) センターが行うボランティア活動に係る企画、立案及び実施に関する事。
- (3) 外部の組織及び機関との連携に関する事。
- (4) センターの予算の執行に関する事。
- (5) 学生スタッフに関する事。
- (6) 前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要な事。

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議の結果を、運営委員会に報告する。

（学生スタッフ）

第19条 センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。

- 2 学生スタッフは、実務委員会の委員の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。
- 3 前項の補佐業務は、無償とする。
- 4 学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

（所管）

第20条 この規則は、学生生活部が所管する。

2 センターの運営等に係る事務は、学生生活部学生生活課及び相模原事務部学生生活課が所管する。

（改廃手続）

第21条 この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附 則

この規則は、2016年11月25日から施行し、2016年10月1日から適用する。

附 則（2018年1月25日）

この規則は、2018年4月1日から施行する。

附 則（2018年6月18日）

この規則は、2018年6月19日から施行し、2018年4月1日から適用する。

5.3 ボランティアセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ

2018 年度ボランティアセンター運営委員会

センター長（委員長）	鈴木 眞理 教授
副センター長	高橋 良輔 教授
大学宗教部長	塩谷 直也 教授
ボランティアコーディネーター	佐藤 亜希
	秋元 みどり
	三神 憲一
	島崎 由宇
	中尾 匠吾
事務局長	菅野 治男
学生生活部長	内山 吉嗣
政策・企画部長	白濱 哲郎
学務部長	馬場 俊和
相模原事務部長	原 啓

2018 年度ボランティアセンター実務委員会 委員一覧（2018 年度）

センター長（委員長）	鈴木 眞理 教授
副センター長	高橋 良輔 教授
ボランティアコーディネーター	佐藤 亜希
	秋元 みどり
	三神 憲一
	島崎 由宇
センター長指名	中尾 匠吾
学生生活部学生生活課	斉藤 恭子
学生生活部スポーツ支援課	長谷川 恒平
学務部教務課	堺野 隼人
学務部国際交流課	松木 直子
相模原事務部学生生活課	阿部 竜也
相模原事務部学務課	井上 裕太
学生スタッフ代表	鏡 詩織（総合文化政策学部総合文化政策学科）

事務所管

学生生活部学生生活課（青山キャンパス）	斉藤 恭子
	藤枝 彩香
	中尾 匠吾
（相模原キャンパス）	阿部 竜也
	松本 宏美

学生スタッフ

執行部

代表	鏡 詩織
副代表	渡辺 諒真
東北部リーダー	柳田 泰樹
地域連携部リーダー	佐野 真理香
国際協力部リーダー	本間 健太郎
災害支援部リーダー	大平 沙穂
総務課リーダー	齋藤 健太
広報課リーダー	櫻井 有沙
渉外課リーダー	津嶋 優奈

学生スタッフ

東北部	国際協力部	地域連携部	災害支援部
浅里 玲	大森 蘭	秋山 桃子	大平 沙穂
天野 日和	岡本 佳奈美	荒嶋 万理奈	宇佐田 和子
安藤 清香	落合 ありさ	石瀬 結香	岡本 育也
大滝 理紗	鎌田 優	磯崎 諒介	岡本 凌翼
大平 沙穂	佐々木 梓乃	小島 優希	鏡 詩織
岡林 真琴	須藤 聖佳	齋藤 健太	高力 葵
鏡 詩織	荘 禮陽	定由 諒	櫻井 有沙
北原 佳惟斗	大工 美津希	佐野 真理香	定由 諒
小林 佳奈子	高橋 里緒	菅田 十和子	東海林 隼
小湊 紗智乃	塚田 美咲	高橋 和也	竹内 ゆきの
古村 花織	中村 真梨	谷 茉奈美	津嶋 優奈
櫻井 有沙	西溜 夏美	堀内 秀平	走川 万希子
佐藤 果歩	野田 祐奈	益山 りさ	松嶋 玲衣
茂野 みさき	本間 健太郎	三上 峻	水野 麻里衣
菅野 葉月	森本 優里	持丸 雄太	吉本 雅
染谷 彩	安村 真緒	山下 誠	吉年 由加里
津嶋 優奈	ヤマウチ 恵凜	吉田 恵美花	
鳥山 歩生		渡邊 菜摘	
真船 絵里			
水田 瑛吉			
三森 純奈			
柳田 泰樹			
山崎 航太郎			
山本 有紀			
吉澤 萌枝子			
吉田 知貴			
渡辺 諒真			

5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆さま

(順不同・敬称略)

【提携・協力団体】

東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター

渋谷区社会福祉協議会

しづやボランティアセンター

東京都生活文化局

渋谷区都市整備部

渋谷区危機管理対策部

株式会社 I V Y C S

宮城県塩竈市

宮城県塩竈市教育委員会

陸前高田ドライビングスクール

社会福祉法人燦々会あすなろホーム

二又復興交流センター

陸前高田市復興支援連絡会

南阿蘇観光復興プロジェクト交流協議会

南阿蘇村役場

阿蘇復興への道

阿蘇健康農園

久永屋

株式会社ジャパンブランドマーケティング

みなみあそ村観光協会

一般社団法人九州学び舎

N P O 法人阿蘇エコファーマーズセンター

秋田県仙北市

秋田県仙北市教育委員会

岡山県総社市

岡山県総社市教育委員会

岡山県総社市社会福祉協議会

一般社団法人ならはみらい

カトマンズ市役所

Food for Life Nepal

ジャカルタお掃除クラブ (JOC)

カノッサ修道女会

シキホールズ エンジェル

認定 NPO 法人 難民支援協会

幡ヶ谷社会教育館

恵比寿社会教育館

日本財団学生ボランティアセンター

独立行政法人国立青少年教育振興機構

スタディツアー研究会

日本サービス・ラーニング・ネットワーク

NPO 法人アクションポート横浜

災害救援ボランティア推進委員会
NPO 法人シェアマインド
相模原市社会福祉協議会
CEMLA 多文化学習活動センター

【寄付・助成をいただいた皆様】

青山学院大学後援会
青山学院校友会
青山学院校友会大学支部
東日本復興支援コンサート
同窓祭実行委員会
青山学院クワイア有志
Yahoo! 基金
一般財団法人 学生サポートセンター

【その他お世話になった皆さま】

NPO法人セカンドハーベスト・ジャパン
初台キッズ
浦戸諸島各地区の皆さま
NPO法人浦戸アイランドクラブ
NPO法人 High-Five
宮城県塩竈市立第一、第二、第三、玉川、月見ヶ丘、杉の入小学校
藤倉児童館
塩竈市魚市場
塩釜水産物仲卸市場
塩竈市適応指導教室けやき教室
塩竈市学びの支援センター「コラソン」
桂島海水浴場 海の家「かもめん家」、「たからや」
野々島フラワーアイランド
宮城県塩竈市第一中学校
陸前高田グローバルキャンパス
木ノ内農園
ノースグレープファーム
はな阿蘇美
波野農場
榊農園
ポートランド州立大学
Collaborative Schools Networks
DHURMUS SUNTALI FOUNDATION
消費者庁消費者政策課
KURADASHI.jp
流通から農と地域を考える学生団体ゆう -You-
丸全昭和運輸

**AOYAMA GAKUIN
UNIVERSITY
VOLUNTEER CENTER**